

岩波文化人として活動するメディア知識人の  
「メディア知識人の度合い」の比較  
—扇動をはじめとした覇権戦略の観点から—

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2016年3月

松井勇起

## 目次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 1.はじめに .....                  | 3  |
| 1.1.研究背景.....                 | 3  |
| 1.2.研究目的・意義.....              | 5  |
| 2.先行研究 .....                  | 6  |
| 2.1.知識人論の系譜 .....             | 6  |
| 2.1.1.ジュリアン・バンダの知識人論 .....    | 6  |
| 2.1.2. オルテガの専門知識人批判 .....     | 7  |
| 2.1.3.ブルデューの覇権戦略論 .....       | 9  |
| 2.2.竹内洋の知識人論 .....            | 10 |
| 3.定義 .....                    | 16 |
| 3.1.知識人論の整理 .....             | 16 |
| 3.2.メディア知識人の定義 .....          | 19 |
| 3.3.作業 .....                  | 19 |
| 3.3.1.メディア知識人指標の作成.....       | 19 |
| 3.3.2.生成消滅過程 .....            | 25 |
| 3.3.3. (絞り込む前の) 対象.....       | 26 |
| 3.3.4.新しく扱うことになった対象 .....     | 27 |
| 4.結果 .....                    | 27 |
| 4.1.各人物と書物・オールド・リベラリスト世代..... | 27 |
| 4.1.1.和辻哲郎 .....              | 27 |
| 4.1.2.安倍能成 .....              | 28 |
| 4.1.3.阿部次郎 .....              | 28 |
| 4.1.4.津田左右吉.....              | 29 |
| 4.1.5.小泉信三 .....              | 29 |
| 4.2.各人物と書物・清水丸山世代.....        | 29 |
| 4.2.1.大塚久雄 .....              | 29 |
| 4.2.2.都留重人 .....              | 30 |
| 4.2.3.宮城音弥 .....              | 31 |
| 4.2.4.南博 .....                | 31 |
| 4.3.指標の当てはめ結果.....            | 32 |
| 5.考察 .....                    | 37 |
| 5.1.指標ごとの数値グラフ化.....          | 37 |
| 5.2.属性リスト .....               | 40 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| 5.3.竹内類型の代入 ..... | 43 |
| 5.4.各知識人の実際 ..... | 45 |
| 5.4.1.清水幾太郎 ..... | 45 |
| 5.4.2.丸山眞男 .....  | 47 |
| 5.4.3.和辻哲郎 .....  | 48 |
| 5.4.4.阿部次郎 .....  | 50 |
| 5.4.5.安倍能成 .....  | 50 |
| 5.4.6.津田左右吉 ..... | 51 |
| 5.4.7.小泉信三 .....  | 52 |
| 5.4.8.大塚久雄 .....  | 53 |
| 5.4.9.都留重人 .....  | 54 |
| 5.4.10.宮城音弥 ..... | 56 |
| 5.4.11.南博 .....   | 57 |
| 5.5.まとめ .....     | 58 |
| 6.結論 .....        | 63 |
| 参考文献 .....        | 64 |
| 謝辞 .....          | 68 |

## 1.はじめに

### 1.1.研究背景

岩波書店は2014年に岩波講座として「政治哲学」のシリーズ<sup>1</sup>を全六巻<sup>2</sup>で出版した。このシリーズでは、主権の概念がヨーロッパで発生する16世紀のマキャベリ<sup>3</sup>をスタートに、最後の第六巻ではジョン・ロールズと、熟議やフェミニズムなどそれ以降の現代政治思想<sup>4</sup>を扱う。すなわち、宗教と政治の分離が始まって以来の政治哲学を全時代網羅したということになる。その中の第四巻「国家と社会」の帯には「大衆の登場に政治哲学はどう応えたのか」と、表の表紙の裏には「二〇世紀前半には、既存の秩序の自明性が失われ、あらゆる前提が疑われた。この時期、政治社会への大衆の参入という新たな条件に対応すべく、さまざまな理論が噴出し、複雑に絡み合う様相を呈した。政治的主体のあり方、市場/国家関係、そして決定論と自由の相克等をめぐる多様な構想を問い直しつつ、現代の政治を理解する手がかりを探る」とそれぞれ書かれてある。第四巻で扱う政治哲学は大衆社会化がテーマとなっており、それは20世紀初頭までに出現し始めた<sup>5</sup>ものであった。

20世紀は大衆の時代であるとともにメディアの時代でもある。ウォルター・リップマン(1922=1987)が明らかにしたステレオタイプ<sup>6</sup>の知見を皮切りに、メディアの効果論が盛んに唱えられた。佐藤(1998)はメディア効果論の歴史をまとめて、時期によってメディアの影響力の高さへの認識が異なることを指摘しているが、どの時期であってもメディアの影響

---

<sup>1</sup> 編集委員は全員が政治思想・政治哲学・政治学史の第一人者である佐々木毅東大名誉教授、藤原保信早稲田大学元教授、勝田吉太郎京大名誉教授の弟子の何れかであり、その意味でも現代における政治哲学のスタンダードであるといえる。

<sup>2</sup> 佐藤(2013)によれば、日本出版史に於ける最初の一般名詞「講座もの」は三木清の発案によって1928年2月刊行の『岩波講座 世界思潮』から始まる。「講座」形式の企画は既に存在していたが、「岩波」書店というメディア＝媒介者が「講座」の前面に押し出されて、岩波ブランド形成に一役かった。各大学の講義を一般に開放する、という岩波茂雄の理念のもとで始まった「岩波講座」は所謂講座派のもととなった『日本資本主義発達史講座』のような特定の学閥によって構成されるものには付かず、かつ各大学の優秀な教授にのみ執筆を任せるという方針を採用した。そのため、質の高さを保証するものとみなされ、「岩波講座」に執筆できる帝大教授に権威が付与される効果が発生し、竹内(2003)によれば帝大ブランドとの権威の相互関係が生じるに至った。

<sup>3</sup> 『岩波講座 政治哲学』においては、マキャヴェッリと表記されている。

<sup>4</sup> 『岩波講座 政治哲学』の「刊行によせて」の文章によると、ロールズの政治哲学によって政治学外からの政治哲学への参入が活発化して現代の政治の問題が再検討されるようになったとする。

<sup>5</sup> 杉田敦は『岩波講座 政治哲学』第四巻の序文とギュスターヴ・ル・ボンを扱う最初の論文で、都市化・産業化と労働者階級への選挙権付与による政治参加を大衆（ル・ボンの用語では「群衆」である）が出現した理由に挙げている。そのため、各国ごとに大衆社会化の出現と進展度合いは異なる。例えば、日本では1925年の加藤高明内閣による男子普通選挙法の施行が決定打になっている。また、鈴木(2005)はE・H・カーが分類したことを指摘しているが、これも大まかに重なる。

<sup>6</sup> 多くの人に共有されて影響力を持つ偏見・見方のこと

力は無視できないものであると認識されていることには変わりがない<sup>7</sup>。

メディアの発達が国民国家の形成を促した<sup>8</sup>のと同じ原理で、大衆とメディアの発達は相関関係にある。メディアはメッセージであり、身体・感覚器の延長である（マクルーハン(1964(=1987)))。雑誌、文庫、新書、ブックレット、ラジオ、テレビ、インターネットと多様化していく裏にはそれを欲する人間の欲望が存在<sup>9</sup>し、例えばラジオの発達がナチスを支えた（佐藤(2006,2014)）側面がある<sup>10</sup>。

現在では新強力効果論以降新しい理論は発掘されず、メディアの効果が実際にいかなるものであるかという実証研究が行われている（池田(2007) ,蒲島・竹下・芹川(2010),など）。更に、政治的思想による偏向報道も、1993年の椿事件<sup>11</sup>が起きるなど世間を騒がせていて実際に政治的権力に影響を与える場合もある。

以上の議論はメディアと政治・大衆に焦点を当てたものであるが、勿論メディアはそれ単体が独立して存在しているわけではない。メディアの周辺には記者や社員などメディアに属する人物と、メディアに属さないもののメディアを用いて発信する人間とがいて、前者がマスコミ社員やスポンサーであるというようにまとめることができ、後者は所謂知識人と呼ばれる存在である。竹内洋(2014)はこうした知識人をメディア知識人であると定義（詳しい定義は後の文章で詳しく述べる）している。

こうしたメディア知識人はイデオロギーの拡散、アジェンダセッティング能力<sup>12</sup>といった様々な影響力を行使する。テレビ番組に出演するメディア知識人の中には、一種の人氣者・スターとして扱われている人物もいて、「知識人＝学者＝論文や本を書く人々」に限定されるわけではない。

---

<sup>7</sup> 具体的には、リップマンらによる弾丸モデル（皮下注射モデル、強力効果論）、ラザースフェルドによる限定効果論、ノエル＝ノイマンの沈黙の螺旋理論などによる新協力効果論（中間効果論）といった形に推移しており、メディアの影響力、というもの自体が一つの論でありあらゆる側面から様々なことが言える。（谷口(2015)）

<sup>8</sup> ベネディクト・アンダーソンは新聞や本といった活字メディアがその国の国語（＝国民国家が認定する公用語）で書かれた情報を民衆に提供し情報共有することが国民国家形成に大きな役割を果たしたと指摘している。（アンダーソン(2006=2007)）

<sup>9</sup> こういう考えをメディアにおける社会決定論という。対義語は技術決定論で、例えば「SNSが出現したことでアラブの春が発生した」というようなメディア技術の発達が主で社会変動が従とするものである。社会決定論と技術決定論は対立的であるものの相補的でもあり、経済学におけるセイの法則（供給が需要をつくる）と有効需要の原理（需要が供給をつくる）の関係と同じである（飯田・中里(2015)）。

<sup>10</sup> 既に「ナチスの見事な宣伝」の原型はドイツ社会民主党のラサール時代にやっているなど、細かく見ていくと単純に言い切れない側面はいくらでもある。

<sup>11</sup> テレビ朝日（当時の正式名称は全国朝日放送だった）の当時取締役報道局長だった椿貞良が「小沢一郎氏のけじめをことさらに追及する必要はない。今は自民党政権の存続を絶対に阻止して、なんでもよいから反自民の連立政権を成立させる手助けになるような報道をしようではないか」と日本民間放送連盟の第6回放送番組調査会の会合で見解をまとめ、自民党に不利な報道や番組を作成したことで、結果的に非自民連立の細川政権樹立に寄与したというものである（蒲島・竹下・芹川(2010)）。

<sup>12</sup> 議題設定能力ともいう。内容ではなく議題の争点への着目に影響を与えることを指す。

## 1.2. 研究目的・意義

以上の背景を踏まえ、本研究ではメディア知識人について扱っていく。メディア知識人はメディア及び大衆と相互に関係しあう存在<sup>13</sup>であり、以下の図のようになっている(図 1)。

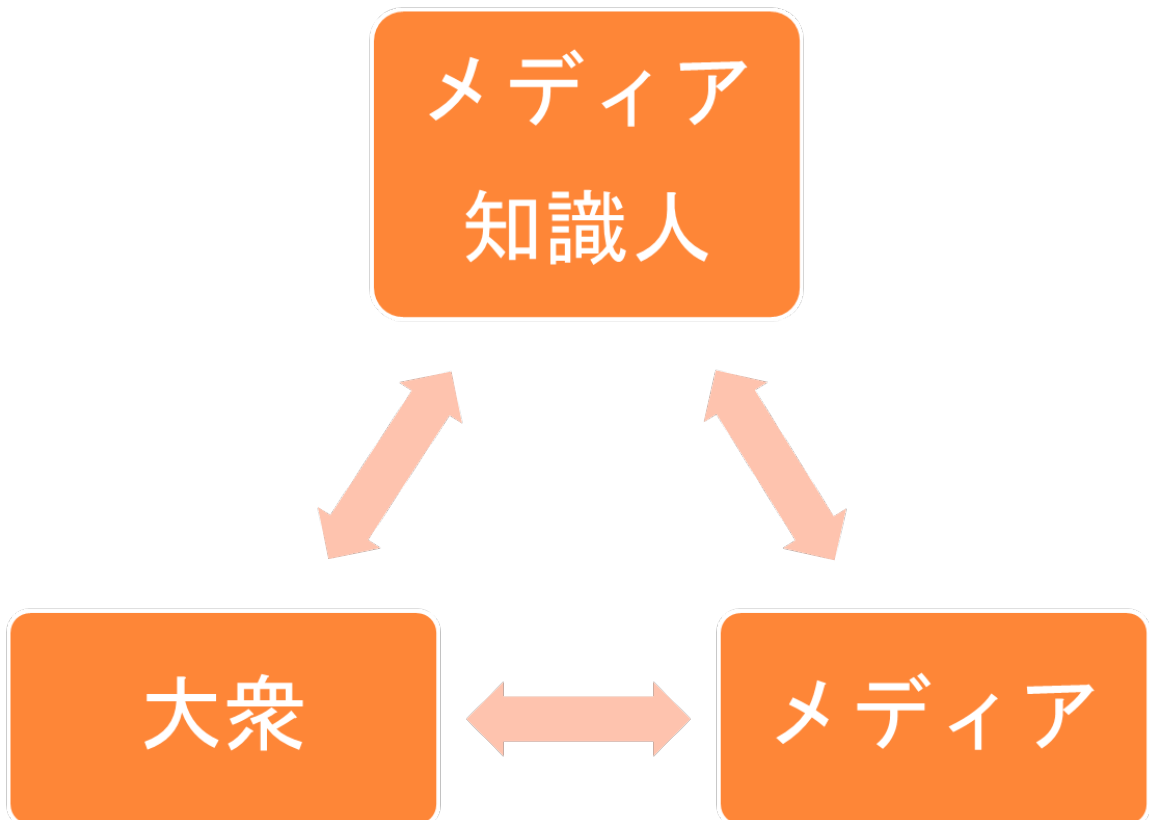


図 1

図 1 を前提とすると、メディア知識人自体を扱いつつも大衆やメディアとの相互影響の部分も適宜考える必要性が出てくる。従来では、古典的な大衆論やメディア論、もしくは知識人論の各論が中心であり（これらについては後述する）、三者を全部射程に置いたものが少ない。本研究ではこれらをバランスよく扱うメディア知識人研究を目指していく。

<sup>13</sup> 大井(2004)は「メディアによる知識人の利用」という観点から、メディアから知識人を分離して論じた。大井によればそのような試みはほとんどなかったという。本研究は、大井の問題意識を引き継いだものでもあると言える。

## 2. 先行研究

### 2.1. 知識人論の系譜

#### 2.1.1. ジュリアン・バンダの知識人論

この章では、19世紀末に出現した知識人という言葉と、その論の歴史を俯瞰することでメディア知識人という概念を確認していく。その流れから見えるものによって整理することが可能だからである。具体的には、ジュリアン・バンダに始まりオルテガ、ブルデューを経由した知識人論は竹内洋の諸論考に結実した。そのため、バンダが知識人論論じるきっかけとなった19世紀末のフランスの状況から説明していく。

知識人という言葉は、フランスのドレフュス事件(1894年)<sup>14</sup>に遡る。この際、小説家であるエミール・ゾラをはじめとする文人たちがドレフュス擁護の立場で論陣を張るが、これを反ドレフュス派の小説家・政治家のモーリス・バレスらが抽象的思考しかできずに現実的ではない「知識人」とレッテルを貼って非難したのが知識人という言葉の最初である。

その後、フランスのユダヤ人作家ジュリアン・バンダ<sup>15</sup>は『知識人の裏切り』(1927=1990)で、「正義や真理といった普遍的なものを語るべき知識人がモーリス・バレスのように党派的政治的議論に熱中し本来の役割を忘れていく」という批判を展開し、知識人という言葉を使用した。政治的党派性を丸出しに特定の勢力・権力に媚び従属するような知識人を戒めたバンダは王党派<sup>16</sup>からマルクス主義者まで幅広く敵対されたという<sup>17</sup>。無論、正義や心理など普遍を語る知識人は実際どれだけいたのかはバンダ自身も認めているようにか

---

14 フランス陸軍参謀本部大尉でユダヤ人のアルフレド・ドレフュスはドイツ帝国へのスパイを働いたという疑いによって冤罪にもかかわらず逮捕され、反ユダヤ勢力の新聞の煽りなどもあって有罪となった。真犯人がわかった後も有罪が覆されず、フランスの国論を二分する論争となり、不安定な第三共和政を揺るがした。反ドレフュスの論陣を張った保守派・軍部主流派（ドレフュスの上司で情報部長だったピカール中佐など少数ながら擁護する者もいたが、軍はもみ消しを図った。）の権威が失墜し共和制擁護派・民主派が主導権を握ったことでようやく第三共和政は安定した。

15 トニー・ジャット(1998=2009)は、1930年代に入って正義・真理・権利そのものがイデオロギー的に定義されることによってバンダの区別は意味を失って公平な評価基準はどこにもなくなってしまったと指摘している。

16 フランスは1848年の二月革命によって国王ルイ・フィリップによるオルレアン王朝が倒れて以来王政に戻ってはいないものの、王政復古を支持する王党派（ブルボン派・オルレアン派）は一定程度存在する。

17 ジャットは、バンダはスターリンによる国際的左翼主義を盲目的に支持することが「責任ある政治参加」であると見なすようになってしまい、従来バンダが批判していた「フランスとフランス国民を何よりも最優先する右翼」と全く同じ状況に陥ってしまったと批判した。20世紀フランスは共産主義のとらわれたサルトルをはじめ大半の知識人が党派性に囚われ知識人であることを裏切った存在に落ちぶれたとしている。『知識人の裏切り』がまさにその著者バンダを含むフランスの知識人ほぼ全員に当てはまる、というのは皮肉というほかない。

なり理想的な状態を想定<sup>18</sup>したものであり、一つの理念型として考えるべきである。

### 2.1.2. オルテガの専門知識人批判

ジュリアン・バンダの知識人論はあくまであらゆる党派的権力を批判する理念的な知識人という、バンダ自身でさえ完全にはできなかつた完全な存在を前提にしたうえで、それから外れた知識人を「本来の知識人の役割を裏切った」存在であるとして批判するというものであった。それは単純に言えば善悪二元論的であり、知識人の権力批判のやり方のみに注目するものである。そこで、次に紹介するのは所謂「専門知識人」批判である。

スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットは、大衆と高貴な人<sup>19</sup>とを分ける貴族主義的<sup>20</sup>な二分法に基づき大衆論を展開した(『大衆の反逆』(1929=1995))。「大衆というのは、その本質上、自分自身の存在を指導することもできなければ、また指導すべきでもなく、ましてや社会を支配統治するなど及びもつかないことである」という評価の通りオルテガは大衆に批判的であり、ギュスターヴ・ル・ボンの『群集心理』(1895=1987)と同様に近代化によって生じた根本的な社会変動の結末であると見なしている。

しかし、その二分法は人間の個別的な資質に由来するものである。オルテガの文章を引用すると、

「社会はつねに、少数者と大衆という、二つの要素の動的な統一体である。少数者は、特別有能な、個人または個人の集団である。大衆とは、格別、資質に恵まれない人々の集合である」

「人間についての、もっとも根本的な分類は、次のような二種の人間に分けることである。一つは、自分に多くを要求し、自分の上に困難と義務を背負いこむ人であり、他は、自分になんら特別な要求をしない人である」

「社会を大衆とすぐれた少数派に分けるのは、社会階級の区分ではなく、人間の区分であって、上層、下層の階層序列とは一致するはずがない」

と分けている。

つまり、オルテガは社会階級における貴族やブルジョワジーが良い存在であり労働者階級が批判されるべき存在であると見なしているわけではない。貴族・ブルジョワジーにも労働者にも双方に優れた少数派と大半の(批判されるべき)大衆とがそれぞれ存在してい

---

<sup>18</sup> バンダ自身、国家は現実主義的に動くべきであり、理想的な知識人の言うがままに国家が動けば破滅すると指摘しており、非現実的な政治家を逆に「国家への裏切り」としている。前の註を前提にすると意外なことに、バンダは『知識人の裏切り』の1946年版のまえがきでは平和主義者や共産主義者をも批判の対象にしている。バンダは自分の意識の限りでは社会の木鐸であろうとしていたのである。

<sup>19</sup> この分類はドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェによるところが大きい。オルテガはドイツに留学しており、生の哲学について学んでいる。

<sup>20</sup> ウィリアム・コーンハウザーは『大衆社会の政治』(1959=1961)で当時までの有名な大衆社会論を網羅して分析し、オルテガを貴族主義的(対してアレントやフロムを民主主義的)と分類した。



るのだと論じているのだ。

労働者階級だけでなく貴族やブルジョワジーも大半がそうであると批判した大衆とはどんなものだろうか。再びオルテガの文章を引用すると

「大衆とは、みずからを特別な理由によって——よいとも悪いとも——評価しようとせず、自分が《みんなと同じ》だと感ずることに、いっこうに苦痛を覚えず、他人と自分が同一であると感じてかえっていい気持になる、そのような人々全部である」

「大衆は——団結した多数のこの人間たちを見たとき、とてもそんなふうに見えないが——大衆でないものとの共存を望まない。大衆でないすべてのものを死ぬほど嫌っている」

「現時の特徴は、凡庸な精神が、自己の凡庸であることを承知のうえで、大胆にも凡庸なるものの権利を確認し、これをあらゆる場所に押しつけようとする点にある」

「いま分析している人間は、自分以外のいかなる権威にもみずから訴える、という習慣をもっていない。ありのままに満足しているのだ」

「大衆的人間は、状況が暴力的に強くないかぎり、自分以外の何者にも訴えかけることはないだろう」

「今日、あらゆるところを歩きまわり、どこでもその精神の野蛮性を押しつけているこの人物は、まさに人類の歴史に現われた甘やかされた子供である」

「問題は、大衆的人間が愚かだということではない。まったく反対に、現代の大衆的人間は利口で、他のいかなる時代の大衆よりも知的能力がある」

「義務を果たすことより、権利を主張しようとする」

と、以上のようにきめ細やかに観察し叙述をしている。オルテガによれば大衆＝勉強量が足りなくて知的能力に欠ける、というわけではない。優れた少数派と異なり現状に満足し、大衆の中にいることに喜びを覚え同じであるがゆえに満足し、そうであることを大衆でない人にも強要してくると解釈している。つまり、他律的であることに居直って暴力的であることこそ大衆特有の野蛮さであると論じているのである。この「凡庸さ」の観点はアレントの『イエルサレムのアイヒマン』(1963)などにも受け継がれ、無責任な人間の一つの類型を提供している。

続けてオルテガは「専門家こそ、私がいろいろな角度から定義しようとしてきた新しい奇妙な人間のみごとな例である」と指摘し、専門家批判を行っている。オルテガによれば、近代に突入するまでの知識人は高貴な人であり、近代に入ってそれが専門分化したことで大衆に落ちぶれてしまったとしている。

「むかしは、人間を知者と無知の者、あるいは、かなりの知者と、どちらかといえば無知である人に、単純に分けることができた。ところが、専門家は、この2つの範疇のどちらにも入れることができない。かれは、自分の専門領域にないことを知らないたてまえだから、知者ではない。しかし、かれは<科学者>であって、自分の専門の微小な部分をよく知っているから、無知ではない。かれは無知な知者であるとでもいうべきであろうが、事は重大である」

このように、オルテガによれば本来の知識人とは専門領域外の幅広いことのわかる存在であったが、専門分化によって専門外のことがわからない存在に変化してしまったと論じている。つまり、専門領域の細かい（そしてどうでもいいような）知識で武装した大衆でしかないということであり、幅広い教養に富んだ物事を全体的に見ることができる存在ではなくなってしまったということである。こうした専門家・科学者は特定の分野の見方しかできないにもかかわらず、物事すべてを分かったように論じて大衆の先頭に立って大衆を煽る<sup>21</sup>、という見方は後の専門家批判論の原型となった。党派的権力に寄り添って本来の役割を裏切った知識人、というバンダの知識人論とはまた違った、知識人の持っている教養・知識の全体的スケールの中から専門分化する知識人、という新しい知識人論であった。

### 2.1.3. ブルデューの覇権戦略論

バンダやオルテガの知識人論は、あくまで完成したものとしての知識人を論じた静的な分析であり、知識人がどうやって生成されているか、またあらゆる知識人がどのように普段動くように方向づけられているか、といったことまでは論じていない。ここではバンダやオルテガが論じ切れていない動的な部分について紹介する。

ピエール・ブルデュー<sup>22</sup>は社会学の観点から上流階級と庶民階級の文化の違いを分析し、それが家庭教育を中心とする文化資本の再生産がハビトゥスによって行われ、それが結果的に差異化（ディスタンクシオン）していると指摘した(1979)。

更にブルデューは高等教育制度を分析しながら各エリートがそれぞれどのような差異化戦略を行うかを分析した(1989)<sup>23</sup>。人間はまず、自分の自己保存を生物的に最も根本的なものとして抱えておりそれはあらゆる意味での自己再生産であると指摘した。これの手段として様々な行動を意識的にだけでなく無意識にも行っている。その中でも知識人の自己再

---

<sup>21</sup>産業発展によっても知識階級は没落せず社会主義運動に合流できると説いたルカーチや、暴力ではなく合意主体で意見に従わせることが可能であるとするアントニオ・グラムシのヘゲモニー論を逆転させた見方でもある。ただし、ルカーチもグラムシもこうした知識人が物事を全体的に見られない存在であり批判されるべき、というオルテガの立場には立っていない。

<sup>22</sup>ブルデュー自身辺境の田舎から猛勉強の末成り上がったアウトサイダーであり、学歴貴族になったものの文化資本に乏しい存在として扱われてきた複雑な来歴を持つ（加藤(2015)）。それがハビトゥス・文化資本・差異化・再生産論に向かわせ、そのままエリートの権力の生成過程・知識人論へと論が展開していくこととなる。師匠のレイモン・アロンは右派ながらユダヤ人というアウトサイダーで、人気絶頂のサルトルを相手に孤独に戦った存在であるが、ブルデューは左派ながらそうしたアロンの行動原理を受け継いでいると言える。

<sup>23</sup>例えば、名門校で扱うつまらない科目などの客観的には役に立ちにくいことをどれだけ身につけたか、という差がエリート内部での評価になる。そのため、外部からエリートに食い込む人間からすれば、名門校のその経験をしていないことがそのまま出世競争などで不利な方向に働いてしまう。

生産の手段は思想の再生産であり、自らの主義主張がこの世の中に拡大し多くの人がそれを咀嚼し受け入れれば受け入れるほど、知識人としての自己再生産に貢献するという構造になっている。その思想再生産のために更に多くの手段が戦略として様々なものが存在しているとした。図にすれば次の図のようなものになる(図 2)。

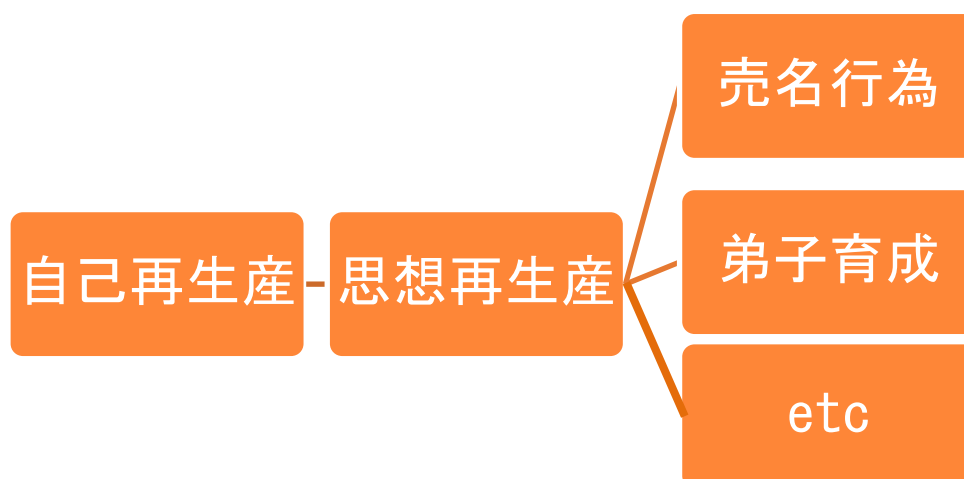


図 2

基本的に、戦略論とは大戦略という最上位カテゴリーのもとで戦略というカテゴリーが存在し、さらにその下に戦術というカテゴリーが存在するという構造が大前提にある<sup>24</sup>。この構図は無論ブルデューも了承済みであり、欧米での戦略論<sup>25</sup>を下地にしている。人間の根本目的である自己再生産が大戦略であり、その中でも知識人に限定すれば自己再生産に対する戦略が思想再生産となる。思想再生産に対する各戦術に様々なものがある、という構図になっている。

## 2.2. 竹内洋の知識人論

竹内洋はメディア知識人<sup>26</sup>とは何か、という定義を『メディアと知識人』では「メディ

<sup>24</sup> 大戦略という概念を明確に用いたのはリデルハートが最初であるが、既にその萌芽は戦争は政治の延長線上であると指摘したクラウゼヴィッツなどにも見られる(アロン(1976))。

<sup>25</sup> ただし、ブルデューは戦略を軍事的もしくは経営学的な戦略概念とは異なり、意識をしていないものや社会構造上そうなっているものであっても戦略という言葉を用いているという重要な相違点がある。

<sup>26</sup> 厄介なことであるが、ピエール・ブルデューはメディア知識人という言葉を用いていながら、やはり明確な定義をしていない。ブルデュー『政治』の訳者藤本一勇の解説によれば「フレキシビリティ」「多様性」「規制緩和」「リストラクチャリング」「柔軟性」などの新自由主義的美名戦略による実態隠蔽(あるいは利害隠蔽)と、「階級」「搾取」「不平等」

アを舞台にしたオピニオン・リーダー」(29p)と明確に定義している。しかし、著書や論文によって言葉が揺れており、公共知識人・テレビ文化人・テレビ文化官僚など様々な名称でメディア知識人を呼んでいる。これらを整理するためには竹内が『大衆の幻像』(2014)でこのメディア知識人と呼ばれるものの来歴について語っている部分をベースに用いるのが有用であり、ひとまず引用する。『大衆の幻像』は竹内が新聞や雑誌などに投稿した文章をまとめた本であるため、ここで引用するのは第三章メディア知識人より、1「大衆高圧釜社会と知識人」から、「テレビの中で消費される知識人」である。

「ここでの目的は、このテレビ大衆社会の「厄介な」構造を、その仕掛け人であるテレビ文化人の特質からみていくことにする。

まずは、テレビ文化人の誕生をその源流である公共知識人にさかのぼってみていこう」(p)

竹内は、この論考では「公共知識人→テレビ文化人」という流れがあることを前提にしている。このテレビ文化人は本研究ではメディア知識人の範疇に含んだものとして扱うが、後述する。

「公共知識人 (パブリック・インテレクチュアル<sup>27</sup>)」は、学会などで専門家に向けて発表したり、学会誌に専門論文を発表したりする専門学者ではない。誰もが考えなければならない政治・経済・社会・文化問題に対して、専門家にむけてではなく、知的公衆に意見を具申する知識人である。もっとも、アカデミックな専門家といえども、昭和戦前期の

---

「資本主義」「公共性」といった用語や概念に対する不平等な扱いは、「表象レベルの新しい帝国主義の産物」である。新自由主義的グローバリゼーションが使用(我有化)するこうした「決まり文句」は「議論で使われるが、それについては議論しない概念や命題」である。そこにはブルデューが自由の根拠と考える「根源的懐疑」を差し挟む余地がない・観念や表象生産の歴史社会的な制約(条件づけ)は隠蔽され、その偶然性は論理的必然的の鎧をまとう。そしてこの論理的必然とされた認識支配的な操作子を理解できなかつたり、それに異議を唱える人々は、新たな「国家貴族」や「企業貴族」、またはメディア知識人という情報貴族によって、知や情報や先端技術に疎い者として排除されるのである(「知性のレイシズム」)

以上の引用文をまとめれば、ブルデューの使ったメディア知識人というキーワードは「国家貴族」「企業貴族」と同列の「情報貴族」という意味で用いている。知識・情報・技術を持っていることで持っていないものへの排除を行うことが出来る支配者であり、国家貴族・企業貴族の立場に立って持てる知識・情報・技術を差分に優位に立つ存在である。もちろん、ブルデューの理論であるハビトゥス・文化的再生産による差異化(ディスタンクション)の一つの例である。

<sup>27</sup> 西部(1996)によれば、知識人と呼ばれるものは欧州語では三通りの意味があるという。一つ目はこのインテレクチュアルだが、二つ目はインテリゲンツァ、三つめはインテリジェントという。竹内がわざわざ英語表記のものもこうした背景があるためである。この三つの分類については後の章で詳しく扱う。

西田幾多郎（一八七〇～一九四五）などの京都学派の哲学者が近代の超克を唱えた<sup>28</sup>ように、一般的な問題をめぐって知的公衆に意見を具申しているときは、その人は公共知識人としての役割を果たしているということになる。彼らは新聞や雑誌によって広場ならぬ活字広場で知的公衆に意見を開陳した」（96,97p）

誰もが考えなければならない問題、という言葉がキーワードとなる。確かに選挙、政策、経済情勢、外交問題、といった問題は実生活を営んでいる人にとってほど遠く考える余裕がないにせよ、デモクラシーを制度上組み込んでいる以上は出来るだけ考えるべきであるとされている。こうした公共的な問題を自力で考えることは難しい。そのための参考になるのがここでは公共知識人、ということになる。<sup>29</sup>当然、公共知識人は情報を発信する際、メディアを通じて発信しなければならないので、メディア知識人の中に公共知識人が含まれることになる。

「戦後は、岩波書店の『世界』を牙城として結成された平和問題談話会の活動は、社会党議員や労働組合員、日教組組合員に大きな影響を与え、教員たちに平和教育の実践を結実させた。丸山眞男や清水幾太郎などが総合雑誌を中心に発信し、公共知識人のスターダムに昇った。昭和戦前期の公共知識人は、社会的動員などの直接的な影響よりも間接的な影響にとどまったが、六〇年安保までの公共知識人の発言は、清水幾太郎の「いまこそ国会へ請願のすすめ」という論文が安保改定反対の国会デモに大きな動員力となったように、直接的な影響力をもち、日本を動かしたほどである。公共知識人の活動が最高潮に達した時だった」（97,98p）

竹内による知識人論では、丸山と清水が『丸山眞男の時代』『メディアと知識人』というそれぞれの第一冊分で個別に扱われて考察をされた人物である。まさに丸山も清水も安保闘争で岸信介政権と戦った人物であり、当時を代表する学者と言って過言ではなかった。その丸山と清水は、専門知識人としても、公共知識人としても権威と実績として申し分がないと扱われており、後述するような竹内が批判するメディア知識人と異なり「良いメディア知識人」であった。

---

<sup>28</sup> 近代の超克関連の座談会には、正確には西田幾多郎本人は参画していない代わりに、派四天王と呼ばれる四人の哲学者である高山岩男・高坂正顕・鈴木成高・西谷啓治が「世界史的立場と日本」座談会を開いて大東亜戦争下の『中央公論』にて大東亜戦争を「世界史の哲学」の立場から思想的に位置付けようと試みた（植村(2008,2010)）。

<sup>29</sup> ショーペンハウアーはヘーゲルなどを念頭に同時代にお金と名声のために本を出す知識人とその知識人たちの本を読む人を批判し、自分で古典を読んで思索すべきと主張している。しかし、それが如何に難しいかはショーペンハウアーの批判通りに世の中が動かなかったことから明らかである。

「しかし、最高潮は終わりの始まりである。(中略)自身が輝ける公共知識人だった丸山眞男は、そんな公共知識人の没落を予期するように、テレビはまだそれほど普及していなかったが、週刊誌文化が席卷し始めた一九五六年に、早くも公共知識人の行方を占う言葉を書き残している。いまや知識人ジャーナリストは「文化人」という広範なカテゴリーに吸収され、「芸能人」の文化人への「昇格」と「文化人の芸能人化」がおこっている(『現代政治の思想と行動』上巻、未来社、一九五六年)と<sup>30</sup>。丸山のいう知識人ジャーナリストとはここでいう公共知識人のことである。」(98,99p)

加藤秀俊の『中間文化論』の刊行は1957年である。加藤の論の内容は所謂低俗で戦争を煽った講談社文化対ハイブロードで理知的な岩波文化という対立構造が言われている中での反論の一形態である(佐藤(2013))。低俗でも高級文化でもない中間文化を、加藤は新書ブームやミュージカルなどから垣間見た<sup>31</sup>が、丸山の弟子藤田省三が酷評したようにアカデミックエリートからすれば、違和感があるものでしかなかった(竹内(2014))。丸山がこうした動きに批判的になるのも当然である。

「当時、丸山の弟子の藤原弘達は、アカデミックな世界から政治評論ジャーナリズムに進出した。ラジオ、そしてテレビにも出始めた。一九六〇年前後からテレビの常連文化人となり、「モーニングショー」やニュース番組、クイズ番組の常連にもなりはじめた。そんな電波広場の文化人藤原をみて、丸山は側近に「もう(藤原とは)一緒に(研究会を)やれないな」といったそうである。だから、丸山は「文化人の芸能人化」という自分の予測が弟子の藤原弘達の電波マスコミへの進出で実証されたとおもっただろう。文化人の芸能人化は、藤原を先達として竹村健一などが続いた。一方、「芸能人の文化人化」は北野武か

---

<sup>30</sup> 丸山がこの話題に触れた一節の全文は以下の通り。

「この点も前註と関連して戦後著しく流動化し、両グループの文化的断層はかなり連続するようになった。というよりは、大学出身のサラリーマン層＝インテリという等式が破れ、一方サラリーマンが大衆化するとともに、他方学歴のない勤労者層から組合活動などを通じて実質的インテリが成長した。また戦前までの知識人ジャーナリストは、「文化人」というより広範なカテゴリーに吸収され、一方「芸能人」の文化人への「昇格」と、他方文化人の芸能人化(マス・メディアへの依存症の増大)をもたらしている。「文芸春秋」の「国民雑誌」化や週刊誌の氾濫は、そうした新たな流動化傾向を象徴するものといえよう。しばしば大新聞の保守性に対比される総合雑誌の進歩的色彩は、一見戦前からの伝統の継続のようである—むしろそういう面もないとはいえない—がその読者層の推移と関連させてみるときは、必ずしも社会的意味は同じでないと思われる。」

<sup>31</sup> 加藤の師匠南博はテレビなどの庶民文化に親しく接しており、岩波文化人の中でもハイブロードな感じが弱い人物であった。また、竹内(2001,2014)は南の教え子でもあり後に東京都知事になる石原慎太郎や、長野県知事になる田中康夫などを挙げて一橋大学のハビトゥスは帝国大学の正統に近い異端でありつつ商人文化的であることを指摘し、大衆ポピュリズムに極めて親和的であったとした。その意味では加藤の『中間文化論』はその発露の一形態とも言える。

ら爆笑問題<sup>32</sup>へとつづいている」(99p)

藤原は1945年に東京大学法学部を卒業し、明治大学教授を務めた人物でもある。当初は『官僚の構造』(1948年)、『近代日本政治思想史序説』(1952年)といった本を出す人物であった。一方でその当時には雑誌『思想』に「右翼ナショナリズムにおける戦後の特質の所在—その思想的立場の問題」(1952年)「日本のネオ・ファシズム—その精神的背景との関連」(1953年)といったいかにも丸山の弟子というべきタイトルの論文を投稿していて、その萌芽はあった。丸山の「超国家主義の論理と心理」に感銘を受けて大学院で丸山の指導を受けた<sup>33</sup>藤原は、保守的な立場から政治評論に参加し創価学会を批判しテレビ番組の司会まで務めた。その藤原は晩年北野武の「平成教育委員会」にも出演したのだから、竹内の指摘はその意味でも示唆的である。

「いまやテレビ文化人が公共知識人化し、公共知識人がテレビ文化人化している。テレビのコメンテーター文化人がかつての公共知識人の役どころを担っている。かつては、オピニオン・リーダーの頭目は活字文化人だった。ラジオ文化人やテレビ文化人はどんなに人気があっても、知識人の普遍知やテククラートの専門知の配信者であり、二流文化人あつかいだった。大宅壮一や藤原弘達は活字文化人として頭角をあらわし、ラジオやテレビに流れ込んだ」(100p)

丸山が指摘した「「芸能人」の文化人への「昇格」と、他方文化人の芸能人化」と竹内のう「テレビ文化人が公共知識人化し、公共知識人がテレビ文化人化」は構造上は同じであるが、異なる箇所がある。以前のオピニオン・リーダーのトップは雑誌や本や論文の執筆者であり、活字メディアこそが一流のメディアであったため、活字メディア出身の人物がラジオやテレビに流れることはあっても、逆はなかった。

「ところがテレビは二流メディアから自立メディアになり、そして覇権メディアとなる。そのエポックとなったのは、一九八五年、久米宏をメイン・キャスターとするテレビ的、つまりワイドショー化した、大型ニュース番組『ニュースステーション』の登場からである。文筆とは無縁のコメンテーター・テレビ文化人が闊歩しイニシアティブと握る時代になった。(中略) テレビのコメンテーター文化人を元祖公共知識人のソクラテスやソフィス

---

<sup>32</sup> 北野も爆笑問題の太田も新書の執筆を行ったり、政治情報番組(TVタックル、太田総理など)の司会を務めるなど、お笑い芸人という芸能人でありながら文化人としての社会的機能をも持つとマスコミからもお墨付きを得ている人物として特に際立っている。

<sup>33</sup> 福山誠之館同窓会。”福山誠之館同窓会”。藤原弘達。<http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jinmeiroku/fujiwara-hirotatsu/fujiwara-hirotatsu.htm>。(参照:2015/12/15)。広島県立福山誠之館高等学校は戦前広島県立福山誠之館中学校であり、藤原弘達の出身校である。

トに、テレビ文化人の大学教授への転身をダニエル・ベルになぞらえるのは、もちろん笑止というほかない。ワイドショーのコメンテーターや元スポーツ選手のまじめくさった顔つきで経済問題へのチープなコメントなどは論外としても、「政治的適切さ（ポリティカリー・コレクトネス）」コードを上回る「テレビ的適切さ」に沿って、いわずもがなの解説をするニュースキャスターやテレビ慣れした専門家の発言も同類である」（100,101,102p）

差異化とは価値<sup>34</sup>の創造である（ブルデュー(1979)）。ならば、テレビが覇権メディアとなることによって新たに変動するメディアの序列も新たな価値を生む。

竹内は、公共知識人の例としてソクラテス、プラトンやソフィストたち、ヴォルテール、ベンサム、ミル、トクヴィル、マルクス、ウェーバー、福沢諭吉、西周、徳富蘇峰、西田幾多郎、小林秀雄、三木清、羽仁五郎、谷川徹三、丸山眞男、清水幾太郎、ダニエル・ベル、大宅壮一、福田恒存、吉本隆明、加藤秀俊などを挙げている。更に、戦前～戦後期は三木や羽仁らインテリが総合雑誌を媒介に公共知識人の頂点を作り、続いて丸山・清水ら岩波文化人が進歩派として公共知識人の最盛期を築いた。また竹内は、記者出身のジャーナリストらが裾野<sup>35</sup>を作る、としている。

そして教養主義の没落(竹内(2003)、筒井(1995)、荻部(2007))によって、公共知識人・大学・総合雑誌との三者の相互依存構造が崩壊した。その合間を縫う形でテレビの知識人が影響力を発揮するようになったと竹内は論じた(竹内(2011、2012))。つまり竹内は、公共知識人はテレビ文化人に成り下がって、テレビ文化人が暴走することについて苦々しく思っているということが読み取れる。

この引用部分は公共知識人→テレビ文化人、という図式でありあくまでメディア知識人を構成する一部でしかない。そこで、今度は竹内の別の著作である『メディアと知識人』(2012)から、「メディア知識人」という言葉を用いている部分を抜粋する。『メディアと知識人』は、本研究にとって最も重要な先行研究であり、乗り越える対象である。

「清水を代表的メディア知識人（メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー）とみれば、清水についての研究は現代史的意味さえもっている。活字やテレビで活躍するメディア知識人の原型として清水をとらえれば（中略）清水といえれば（中略）女性誌に女性のための人生論を書いたり、銀座の街についての対談にでたり、月刊誌や女性誌のグラビアに何度も登場するなど、いま風の文化人の要素をあわせていた。一瞬だが映画にも出演している。自己をメディア知識人として同定するにはばからなかった」（29,30p）

---

<sup>34</sup> ボードリヤールは、このことを差分は価値であると指摘している。

<sup>35</sup> 例えばマイルズ・フレッチャー(1976)は蠟山政道、笠信太郎、三木清の三人を、ファシズムを煽った知識人として挙げているが、このうちの笠が朝日新聞の論説委員であり戦後も大御所として活躍した人物である。



竹内は清水幾太郎をメディア知識人の典型ととらえている。竹内は清水を公共知識人として認めているだけでなく、いま風の文化人＝テレビ文化人の元祖であるともみなしているのだ。つまり、メディア知識人とは公共知識人とテレビ文化人を両方含んだ表現であるとわかる。

更に、竹内は清水の『私の文章作法』(1971)から「この私にしても、まあ、一種の芸人なのです。ああ、笑わないで下さい」<sup>36</sup>という言葉を含んだ2パラグラフ分の文章を引用しているが、竹内が自虐的と指摘する通りである。自分自身のことを売文業者であると自虐的に語りながらそれでも売文業者をしなくてはならない清水の嘆きは、メディア知識人としての究極の姿であるといえよう。発信したいから場に出るのか、それとも場に出たいから発信するのか、メディア知識人を極めていけば後者へとどんどん進んでいくのである。まさに、目的と手段の倒錯である。

### 3.定義

#### 3.1.知識人論の整理

2.知識人論の系譜では、様々な知識人の類型が扱われてきた。知識人論を扱う論者は竹内以前でもバンダ・オルテガ・ブルデューと複数人存在し、竹内はこれら三人を全員参考にしながら知識人論を論じている。そのため、竹内の知識人論を土台にしながら整理したい。

バンダは知識人と裏切った知識人という対比を用いており、オルテガは専門家と本来の知識人という対比を用いている。ここでの知識人は、バンダもオルテガも良い意味として用いており、バンダは裏切った知識人を、オルテガは専門家をそれぞれ批判するために知識人という概念を用いているといえる。

オルテガまでの知識人論をまとめる際に、西部(1996)の整理が役立つ。西部は本来の知識人をインテリゲンチヤと英語表記し、バンダの言う裏切った知識人をインテリゲンチヤ、オルテガのいう専門家をインテリジェントと表現した。西部によれば、インテリゲンチヤは幅広い知識を持ち、知識の全貌をその人なりに捉えているあるいは常に知識を疑っているため、適応・超越・自省のできる教養人であるとする。それに対してインテリゲンチヤは政治的野心のある活動家にすぎず、インテリジェントはある分野しかわからない専門家であるという。バンダ・オルテガの知識人論を両方含めた形になっているといえよう。

更に、西部は続けて現代の知識人はほぼインテリジェントのみであると言う。時代が進んで知識が膨大になったことによる理論・体系の複雑化、大学や論文評価システム上の問題といった要因により、自分の専門分野しかできない人物でも堂々と学者をやれるようになってきており、それらが要因となっている。西部によれば、そうしたインテリジェントは売文業者として金を得て、自分の専門分野の外についてもさも自分が知っているかのよ

---

<sup>36</sup> 竹内は『メディアと知識人』の帯にこの一節を載せている。この本の副題が「清水幾太郎の覇権と忘却」であり、清水の自虐的自己言及の哀しさに呼応させた形にしている。

うに話すという問題が生じているという。この辺りは竹内の言うテレビ文化人と同じ要素がある。

しかし、竹内の挙げるテレビ文化人は西部の嘆く専門家よりも更に悪いものである。竹内は『大衆の幻像』でテレビ文化人についてこう述べる（引用個所は前の引用の続きである）。

「(中略) 専門家もテレビ的公共文化人になると、テレビ的適切さのコードに沿った定型話法のテレビ学者になる。その意味で、コメンテーターもニュースキャスターもテレビ学者もテレビ文化官僚というべきものになる。

(中略) また、テレビ文化人は無難系のテレビ文化官僚とテレビ的秩序を揺るがすツッコミ系に分かれ、後者はテレビ英雄兼院外団的な無法者として『朝まで生テレビ!』のような討論番組に登場し、世論・世間・大衆を読みながらも揺さぶりをかける、あるいは揺さぶりをかけるかにみせる」(102,104p)

「耳目をそばだてるだけの下流本をだし、テレビ文化人に成り上がることをめざしているむきに事欠かない。現代日本社会の空気といわれているものの正体はテレビ的ウルトラ大衆社会である」(107p)

竹内のテレビ文化人批判はかなり厳しい。阿部(1995,1997,2001,2004)の世間論<sup>37</sup>や山本七平の空気論(1983)の指摘をまとめた鴻上(2009)の論によれば、現代日本では世間が溶解しより柔らかい空気になることによって個人を縛るものがよりわかりにくくなっているとのことであるが、竹内は空気をテレビ的なウルトラ大衆社会であると指摘している。これを読む能力こそが現代のメディア知識人であるテレビ文化人をやっていくにあたって必要な能力である。竹内は丸山の「無責任の体系論」に寄りながら、その原因を天皇ではなく大衆に求めており、丸山の言いだした「ウルトラ」国家主義<sup>38</sup>にかけている。

「文化ポピュリズムの担い手が文化人である。だから「文化人は芸能人化」するが、ゆるい知性もどきが蔓延するがゆえに「芸能人も文化人化」する。エコノミストなどの専門人も文化人化し、メディアを賑わしている。しかし専門人としての抑制のきいた発言ではなく、ウケ狙いの極論を断言する人が多い。テレビやネット論壇は極論競争の場にさえなっている」(109p)

専門家、といえはオルテガや西部からすれば十二分に批判対象であった。しかし、竹内

---

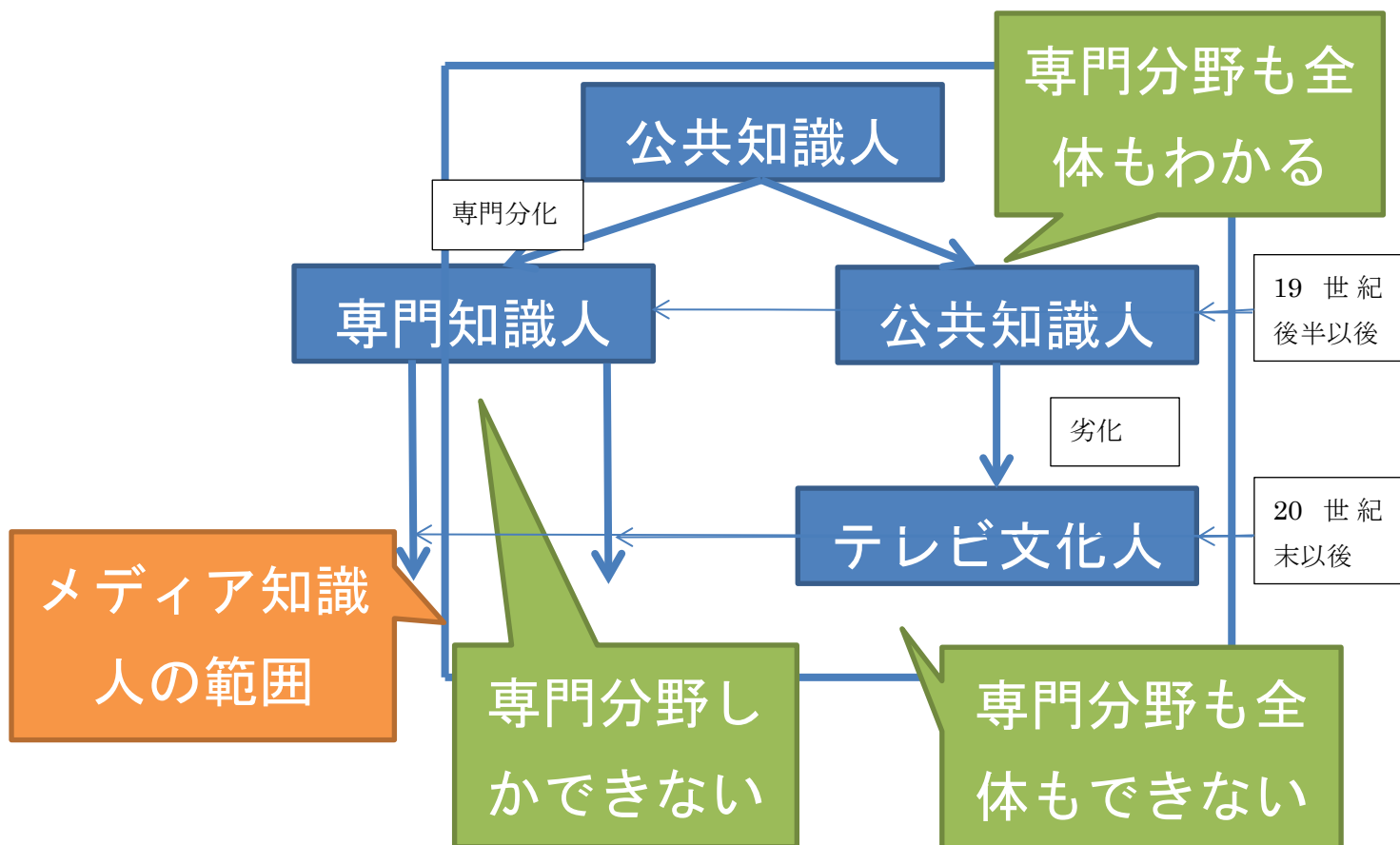
<sup>37</sup> 阿部の論は佐藤直樹(2001,2008)に引き継がれているほか、井上(1977)のものが世間論の嚆矢となっている。

<sup>38</sup> 無論、これは丸山の記念碑的論文である『超国家主義の論理と心理』が元である。ここでの超は「超える」ではなく「より強力な」の意味であり、竹内がここで言っている「ウルトラ」とは、大衆社会がより活発になっていることを指している。

によればテレビ文化人に比べればまだ専門家の方が良い存在なのだという。抑制のきいた発言ではなくウケ狙いの極論を断言するのは、テレビ画面の向こう側にいる大衆が拍手喝采するからであり、そもそも芸能人さえも文化人となる。スポーツ選手やお笑い芸人にはそもそも専門分野でさえなく、逆にあるのは空気を読み空気を作る能力である。どちらかと言えば与党的・専門家的なテレビ文化官僚に対して、庶民代表や権力内部からはみ出た不満分子から構成される無法者タイプが英雄として挑みかかる構図に拍手喝采する大衆、という戦前の軍国主義を形成した空気に近いものであるとさえ竹内は指摘している。専門分野さえない・専門をおろそかにするというのも竹内の示唆に従えば考えものなのである。

以上、本来の知識人（インテレクチュアル、竹内は公共知識人という言葉を使っている）ので以後公共知識人で統一する）、裏切った知識人（党派的知識人、インテリゲンチヤ）、専門知識人（専門家、インテリジェント）、テレビ文化人（専門さえ怪しくひたすら空気を煽る存在）とメディア知識人にかかわる概念を紹介した。ここで諸概念を、メディア知識人を中心にしながら整理することとする。

党派的知識人は厳密にはメディア知識人に完全に含まれるわけではない。マスメディアやインターネットといったメディアで情報発信をしていなくても、例えば地域運動など地元密着でいながら政治運動をやることはできるからである。逆に、メディア知識人であるからといっても、政治的党派活動をしているかは別問題である。また、専門知識人も公に情報発信せずひたすら自分の研究室にこもって自分たちしか読まない学会誌に論文を投稿するタイプもある。それ以外の概念、公共知識人とテレビ文化人はメディア知識人に含まれる概念である。これらをまとめると以下のような図になる(図 3)。



## 図 3

### 3.2.メディア知識人の定義

竹内は「メディアを舞台にしたオピニオン・リーダー」であるとメディア知識人を定義している。オピニオン・リーダーとは、ここでは世論形成者やフォロワーに対して影響力を持っている人物である<sup>39</sup>。そのため、公共知識人・テレビ文化人という言葉は両方含むものとしては、オピニオン・リーダーという言葉は詳しくした「メディアを通じて大衆に向けて公共問題を論ずる者」という定義にすると目的語がわかりやすくなってより明確になる。

### 3.3.作業

#### 3.3.1.メディア知識人指標の作成

##### 3.3.1.1.竹内による丸山眞男/清水幾太郎への言及

メディア知識人を分析するにあたって、対象となるメディア知識人を決定した後何らかの指標を作成して、その指標に当てはめる作業をした方が定性的な分析をする際に分析がより明確になる。その指標を作る際、参考になるのが、竹内が丸山と清水について総括している部分である。それぞれ引用する。

「ジャーナリズム場と他の場との権力関係といい、大学の変貌といい、文化場は丸山が活躍したころとはすっかりちがった構造となっている。丸山もジャーナリズムや政治などの場に進出することで覇権を得たが、丸山は場の移動<sup>40</sup>による汚染には慎重だった。しかし、丸山以後の覇権型知識人は、場を躊躇なく自在に遍歴する知識人である。知識人兼ジャーナリスト兼芸能人というトリック・スター的知識人とでもいうべきだろう。こうみてくると、丸山は、大衆が知識人化への背伸びにつとめた大衆インテリの時代、活字ジャーナリズムがアカデミズムの力をもとに大衆インテリの媒体になった時代、そして法学部的知と文学部的知が交叉しえた時代、そうした時代の中で覇権をにぎることができたことがあらためて確認される。知識人兼ジャーナリスト兼芸能人であるトリック・スター的知識人の擡頭（たいとう）を丸山が嫌った文化人の芸能人化や芸能人の文化人化（『現代政治の思想と行動』「第一部 追記及び補注」『集』六）の極北形態とみなすか、そうした遍歴知識人やメディア知識人としての原型が丸山にあったとみるかについては意見が分かれるに

<sup>39</sup> ラザースフェルドとカツツの二段階の流れモデル、「限定効果論」と呼ばれるメディア効果論に出てくるオピニオン・リーダーは、「近所の人でニュースについてよく知っている人」といった、直接人々と会話を交わすような身近な人物を指す。

<sup>40</sup> 場とは、ブルデューの概念の一つで社会空間の下位概念。日本語で言うところの世間/業界/界限にほぼ該当する、と解釈している。

してもである」(315,316p)

まず、以上は竹内の『丸山眞男の時代』(2005)の最後の文章である。メディア知識人の中でもテレビ文化人的なもの、ここでいう「文化人の芸能人化や芸能人の文化人化」に該当するということはすなわち公共知識人ではなく専門知識人でさえない空気に乗っかって煽る存在でしかない、という意味である。確かに、丸山は空気を読んだ上で安保闘争を煽った人物である。しかし、丸山は「場の移動による汚染には慎重だった」、というように煽り行動を厳選している様子が伺える。次の清水に関する文と比較することで更に考えよう。

「自分の経験を踏み台にした後に、すぐに崩していく清水の流儀が、恒常的に新規さが求められる売文業や転覆戦略に奏功したのか。おそらく、両者がポジティブ・フィードバック作用を励起していたのだろう。そして、過剰なほどのリフレクションが自省のたまものなのか、いつもウケていたいという文筆家の宿痾によるものなのか、見極め難い。いや清水自身にさえも判別しにくいところに強力な文筆戦略たりえた秘密もあったのだろう」(337,338p)

清水の文章スタイルは自分さえも批判の射程圏内に入れてしまうという特徴を持つ。清水による知識人批判は、そのまま清水自身への批判にもなってしまう。自分自身さえも批判するところが、テーマのホットさ・扇動スタイルという意味で、「メディア知識人ぶりをメディア知識人として自省するメディア知識人」という清水の到達点はメディア知識人らしさの究極系である。

「こうもいえよう。清水がメディア知識人として差異化やウケをねらったことはたしかだとしても、そうであればあるぶん、稀代の才人で、かつリフレクションの人である清水は、そうしたメディア知識人の「業」に十分に自覚的だったはずである。したがって、「火中の栗を拾う」というような清水のラジカリズムは、差異化戦略による生存戦略・覇権戦略とうらはらな形で、メディア知識人の「業」一所謂「愛情乞食」(伊藤整)一を払拭するための自己運動でもあったのではないかと思えてくる。あれほどインテリになりたいと思い、インテリそれも大インテリになった頂での知識人への幻滅めいた吐露に自己言及の人だった清水の栄光と悲惨が凝縮されている」(338p)

転覆戦略・覇権戦略・差異化戦略がそれぞれ知識人としての生存戦略たる思想再生産に寄与しているといえよう。もちろん、ラディカルになればなるほどリスクは高まり、成功すればするほど、その哀しさや空虚さを味わい尽くす他がないという。清水ほどにメディア知識人としての高みに立った社会学者はいない(奥井(2010))。しかも、同時代人の中で

も影響力を持ったメディア知識人としてもトップクラス<sup>41</sup>であることは間違いない。その意味で、自己諧謔の精神を持つメディア知識人にまで清水がなったのも納得しやすい話ではある。

「いまや活字メディアにとどまらず、ネット論壇人やテレビ文化人の時代となった。同時に知識人と大衆という知の身分制のもとにメディア知識人が大衆の代弁者であることが疑われない時代が終焉した社会にあっては、大衆の表象＝代理という目隠しがなくなったそのぶん、メディア知識人の差異化戦略、生存戦略、転覆戦略など、「清水的なるもの」は、かえってあからさまになっている。ラジカリズムならぬポピュリズムがメディア知識人の生存戦略や覇権戦略として行使されることやなにかを主張したいのではなく、持続的な執筆、持続的な出演それ自体が目的のようにさえ見えるメディア知識人の志向などが目につきやすくなっている。たしかに清水は忘れ去られた思想家であるが、こうしたメディア知識人の原型として、つまりメディア知識人を象徴する存在として思い出されてしかるべきである。」(338,339p)

『メディアと知識人』の最後にある清水を論じたこの個所では、丸山と違って明確に断言的に清水をメディア知識人の典型であるとしている。つまり、丸山と違って場の移動も煽りも躊躇がないということである。そのことから、竹内は既に丸山と清水が違うタイプのメディア知識人であるということを知っており、両者の取る戦略を区別しているということになる。

### 3.3.1.2.対比による覇権戦略の相違

ブルデューの覇権戦略論を用いて竹内は清水と丸山を対比している。竹内はブルデューの「界」の説明を引用しながら、「界」の法則としてのプレイヤーの戦略として「地道・伸長戦略」と「華々しい戦略・転覆戦略」とを対比する。要は、文化資本・学歴資本の総量が多ければ界の秩序を重んじ一步一步出世する用心深い・守りの戦略を行使しやすく、逆に文化資本・学歴資本が少なければ界の秩序をひっくり返す戦略を行使しやすいということである。

更に、竹内は家庭から相続される文化資本に乏しいものの学歴資本が高い清水は、野心が学歴資本で高まりながらも文化資本の貧弱さから二流扱いされやすい状況に陥ってしまうと指摘している。多くの傍系知識人は実際には小判鮫的な「分相応戦略」によって界の構造を再生産しながら、お零れをもらうことが安定的である。しかし、清水は学歴資本は

---

41 竹内は『メディアと知識人』で清水の売れっ子ぶりを示すエピソードやデータを提示しているが、その中でも象徴的なのは「図書新聞」1952年4月28日号の「書いてほしい執筆者」ランキング（大学生・高校生の読書世論調査3490人対象）で、清水が69人に選ばれ堂々の一位になっていることである。二位中野好夫が57人、三位山本有三35人、四位志賀直哉33人、五位谷崎潤一郎30人と続いていくが、清水が如何に別格かを示している。

十分あったのみならず没落した旗本の家系であるという自負心もあり転覆戦略の方向に流れていったという。

一方、丸山は確かに周囲に貧しい子もいて一緒に遊んでいたこともあり、父丸山幹治めやその友人長谷川如是閑という私学出身のジャーナリスト<sup>42</sup>からも影響を受けた（荻部（2006））ものの、基本的には山の手育ちで府立第一中学校、第一高等学校、東京帝国大学、東大教授と文化資本・学歴資本共に十分な王道ルートを歩いてきたと言える。その丸山が、「慎重戦略」を採用するのはブルデューと竹内の理論枠組みからすれば当然の話である。

### 3.3.1.3.先行研究としての竹内の枠組み

竹内は『メディアと知識人』の215pでブルデューの枠組みを用いる効用について以下のように語っている。

「ブルデューの一般命題からくみ取るべき重要な示唆は、知識人の言説（文化的生産物）や実践を知識人の差異化戦略としてみる視点である。そして、このような差異化戦略は、当人の性格や能力などの資質よりも、界における位置＝地位によって、つまり、中心にいる者（正系）か周縁にいる者かによって異なった形で行使されるということである。したがって、[差異化戦略＝（ハビトゥス）（資本）＋界の立ち位置]という公式で示すことが出来る。そして位置から繰り出される戦略は界の構造の作用を受けると同時に界の構造化にも寄与するのである」

つまり、文化資本・学歴資本からくる界での立ち位置が、個人の性格や能力といったものよりも、実際の行動である差異化戦略としての知識人の言動に大きな影響を与えるという仮説になっている。性格や能力は計測しにくい、文化資本や学歴資本ならば客観的に把握しやすい。そのため、あるメディア知識人の言動を従属変数としたとき、それらの独立変数として文化資本や学歴資本を想定すれば、その因果関係が成立しているかを調べるのは容易である。

もちろん、現実が現実すべて文化資本と学歴資本からくる界での立ち位置だけできっちり決まるほど世の中は単純ではない。事実、竹内自身傍流知識人の多くは清水のような転覆戦略ではなく分相応戦略を採用していると指摘しており、清水がその中でも転覆戦略を採用したのは学歴資本自体が高いために正系へのあこがれと対抗意識を両方持って意識しやすいことだけでなく、清水自身の生まれ（旗本の家という自負）や性格面もあることを指摘している。つまり、ここで挙げた枠組み自身竹内はあくまで分析用のツールであると見なしておりそれ以上の評価を与えていないともいえる。

つまり、本研究では竹内のメディア知識人/専門知識人/公共知識人という概念に依拠しつ

---

<sup>42</sup> 丸山幹治は東京専門学校（のちの早稲田大学）、長谷川如是閑は明治法律学校（のちの明治大学）、東京法学院（のちの中央大学）などで学んでいる

つ、竹内・ブルデューの枠組みの検証をすることで先行研究への追試的検証あるいは批判的乗り越えを試みるということになる。

### 3.3.1.4.メディア知識人指標の完成

前の章の丸山論と清水論を参考に、ここではメディア知識人の指標と、比較用に専門知識人/公共知識人の指標も作成する。

メディア知識人の指標として参考になるのは竹内の清水論である『メディアと知識人』である。ここでは清水をメディア知識人の典型として扱っており、現代のメディア知識人の原型であるともみなしているからである。清水のメディア知識人ぶりとして指摘されている要素を抽出して図にすると以下のような表が生成される(表 1)。基本的には、○がつくほどその指標での度合いが高くなり、※のついている指標のみ逆に×がつくとその指標での度合いが高くなるようになっている。当然、指標上清水のメディア知識人の度合いが最高値になるように設定されるが、他のメディア知識人との比較するにあたって好都合である。

| メディア知識人指標                     | 清水 | 丸山 | 和辻 | 阿部 | 安倍 | 津田 | 小泉 | 大塚 | 都留 | 宮城 | 南 |
|-------------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 場（業界）の移動                      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| ※場の移動へのためらいがある                |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 移動した先での煽りによって学問の場の知名度向上（覇権戦略） |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 世の中全般の改革/転覆/迎合を狙う             |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| ※煽りへのためらい                     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| メディアに出ることが自己目的化               |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 変節漢であることを厭わない                 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 仲間をメディア・他の場に売り込む              |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 時代/空気/世間に飲まれて理性を失う            |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |



|              |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| ちやほやされたい     |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| テレビへ肯定/テレビ出演 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 自己諧謔の精神      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

表 1

続いて、専門知識人の指標である。オルテガによれば、専門知識人とは大衆の一部であり物事全体を分らずにいながらさも知っているかのようにふるまい大衆を扇動している存在である。しかし、一方である専門分野は非常に詳しいという側面があり、竹内の批判するテレビ文化人的メディア知識人のように専門分野さえも怪しい存在よりはまだ良いものである。オルテガによる専門知識人批判の部分は、要はメディア知識人一般にも該当する部分であり、メディアに出てこなくてひたすら専門分野と研究室に閉じこもっているような専門知識人もいる。これら竹内のいう専門知識人の、テレビ文化人と比較して相対的にポジティブな側面の指摘を踏まえて、「専門分野はよくわかる」というスタンスの要素を集めると以下のような表になる(表 2)。

| 専門知識人指標              | 清水 | 丸山 | 和辻 | 阿部 | 安倍 | 津田 | 小泉 | 大塚 | 都留 | 宮城 | 南 |
|----------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 当時の最先端を扱う/テーマのパイオニア  |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 学者になった後で専門分野集中時期有無   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 当時の通説に貢献             |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 辞典編纂                 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 専門学会・雑誌創設/個々の学会での影響大 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |
| 専門分野での翻訳             |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |

表 2

最後に、公共知識人の指標である。公共知識人はオルテガの専門知識人に対比される存在であり良い存在である。ここでは、専門知識人と違って一つの専門分野以外のこともしっかりできるという要素や、場の交流の際の良心的な要素を取り出すことで公共知識人らしさを表現した。以上の方針で生成すると、以下のような表になる(表 3)。

| 公共知識人指標 | 清水 | 丸山 | 和辻 | 阿部 | 安倍 | 津田 | 小泉 | 大塚 | 都留 | 宮城 | 南 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|

|                    |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 当時の分野総合            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 複数分野扱い成功           |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 学界外とも広く交流          |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 啓蒙・教養主義的           |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 学界内部での派閥的<br>動きと無縁 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 専門外での翻訳            |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

表 3

### 3.3.2.生成消滅過程

知識人はいつの間にか完成したもの、というわけではなく、ブルデューの覇権戦略論の通り社会的に形成されてきたものである。つまり、メディア知識人の実際の言動＝覇権戦略の決定には竹内やブルデューが特に取り上げている文化資本や学歴資本をはじめとする諸変数がかかわっているということになる。

もちろん、竹内やブルデューが指摘しているような文化資本や学歴資本以外の諸属性や変数もかかわっている可能性は大いにある。これらの変数を最大限挙げることができると、メディア知識人の生成消滅過程のおおよその全体像が浮かび上がってくるといえる。以上を踏まえると、生成消滅過程の全体を図示すると以下のようなになる<sup>43</sup>(図 4)。ここでの知識人の実際の行動は、メディア知識人の指標に該当する箇所である。

<sup>43</sup> 媒介変数とは、独立変数と従属変数の中間に位置して、独立変数が従属変数に影響する際に横から影響力を発揮する変数のことである。

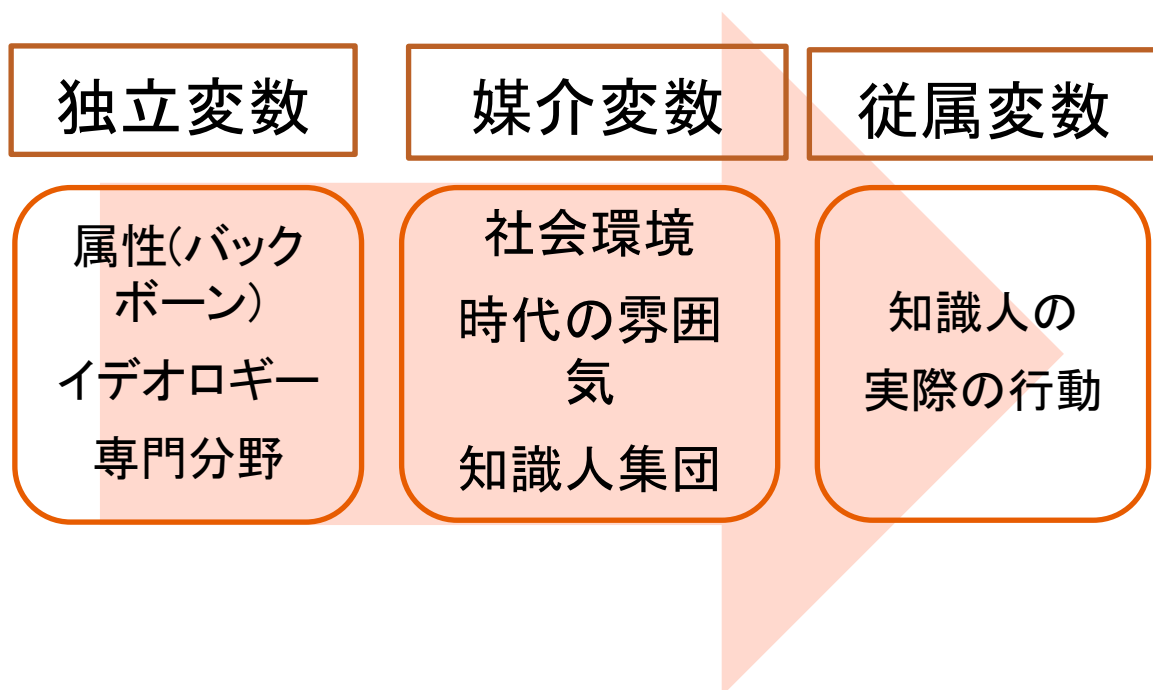


図 4

実際に竹内やブルデューの枠組みに当てはめつつも、各知識人の実態を質的に分析していく中で以上の諸変数・要素の中で何が大きかを見極めていくことになる。

### 3.3.3. (絞り込む前の) 対象

もちろん、まずはメディア知識人でなければならない。しかも、竹内のメディア知識人/専門知識人/公共知識人の概念に基づきながら竹内・ブルデューの枠組みを検証する以上、竹内が分析した清水・丸山と対比しやすい人物でなければならない。

竹内は『メディアと知識人』で清水と吉野源三郎が若手を率いて年配のオールド・リベラリストを岩波書店から追い出しにかかるエピソードを紹介している。つまり、清水は丸山たちを率いて世代間闘争を行ったということになる。

このことを踏まえると、清水と丸山を軸に、清水と丸山の論敵となったオールド・リベラリストの世代と、逆に清水と丸山の同世代の人物からそれぞれピックアップすれば比較できるということである。

また、竹内は同書で清水がオールド・リベラリスト世代を岩波から追放したことでメディア知識人として覇権を握り、かつラディカルさを発揮できるようになったと指摘している。そのため、竹内はオールド・リベラリスト世代を清水のラディカルさを抑えた存在であると認識しており、そのためオールド・リベラリスト世代は清水のラディカルさを実質容認した清水・丸山世代に比べるとメディア知識人度合いは低いということを示唆している。二つの世代を比較することで、竹内の示唆するオールド・リベラリスト世代のメディ

ア知識人度合いの相対的低さの真偽を再検討することも可能である。

サンプル選定の基準は、分野がある程度ばらけること、何れも岩波書店発行の雑誌論文・本を多く出したり有名なものを出した人物であること、出身大学やキャリアが帝国大学とそれ以外とが適宜ばらけること、とした。これにより、竹内・ブルデューの枠組みの追試験をやりつつ、更に独自の分析をする見込みも得られるからである。

そうやって新しく選んだ対象については、現在でも手に入るか、手に入りやすい本をそれぞれにつき数冊選んで読み込み、更に伝記などになるべくあたってメディア知識人・専門知識人・公共知識人としてどうであったかを調べていくこととした。

#### 3.3.4.新しく扱うことになった対象

3.3.3.の選定基準に基づいて新たに選定した結果、オールド・リベラリスト世代からは和辻哲郎（『古寺巡礼』『風土』）、阿部次郎（『合本 三太郎の日記』）、安倍能成（『戦後の自叙伝』）、津田左右吉（『シナ思想と日本』）、小泉信三（『共産主義批判の常識』）を選んだ。清水と丸山の同世代からは、大塚久雄（『社会科学の方法』）、都留重人（『経済学はむずかしくない』『日米安保解消への道』）、宮城音弥（『新・心理学入門』とその前版）、南博（『日本人の心理』）を選んだ。それぞれが分野的には哲学、歴史学、経済学、心理学とばらけており、出身校も東京帝国大のほか早稲田、慶応、京都帝国大、ハーバードと幅広く、キャリアに至っては東大教授のほか東北大、早稲田、慶応、一橋、東工大とこれも幅広い。

次の章からは取り上げた知識人の略歴と取り扱う書物の簡単な紹介を行う。

## 4.結果

### 4.1.各人物と書物・オールド・リベラリスト世代

#### 4.1.1.和辻哲郎

東京帝国大卒、東洋大助教授、京都帝国大教授、東京帝国大教授を歴任。名目上井上哲次郎門下であるが、実質的には夏目漱石及びケーベルの弟子で岩波茂雄・西田幾多郎などとの関係も深い。岩波書店の雑誌『思想』の編集を経験し、戦後は『世界』を創設した一人でもある。専門は哲学・倫理学で主著は『古寺巡礼』『風土』『倫理学』など。所謂オールド・リベラリストであり、戦前は軍国主義者と、戦後は進歩派と対立した。

#### 『古寺巡礼』（1919年→1946年改訂）

和辻が実際に奈良を訪ね寺々を巡り、飛鳥・奈良の古建築・古美術に感動したことを綴ったエッセイ。和辻はこれを執筆した後に恥ずかしがるようになり戦後改訂。苅部によれば「日本古代」の評価を積極的に行うようになったとのことから『古寺巡礼』を執筆したと指摘している<sup>44</sup>。また、岩波文庫版『古寺巡礼』での谷川徹三の解説によれば「若い情

---

<sup>444</sup> また、苅部によれば『古寺巡礼』はより日本礼賛的に内容を書き換えているとのことである。

熱」「感動表現」を削ったとのこと。

#### 『風土』(1935年→1943年改訂)

台風・サイクロンへの対処から受容と激しさを傾向づけるモンスーン型、厳しい環境故の戦闘性をつける砂漠型、規則正しい環境変化より環境を支配しようとする牧場型と三つの風土を想定し、それぞれ東・東南・南アジアと西アジア、ヨーロッパとする。要はするに環境によって人間の傾向が決定されるという論であり、ここでも感覚至上主義者らしい組み立てになっている。当時の状況的にはマルクス主義（下部構造決定論）への対抗の意味を込められている

#### 4.1.2.安倍能成

東京帝国大卒、京城帝国大教授、第一高等学校校長、貴族院議員、文部大臣、学習院長などを歴任。専門は哲学。岩波茂雄の親友にして『岩波茂雄伝』の著者。主に教授能力と教育行政の手腕で活躍した人物で、戦後は和辻や後述する津田らのオールド・リベラリスト世代の一人として反共を主張した。夏目・ケーベル・戦前における岩波人脈の総元締めである。

#### 『戦後の自叙伝』(1959年→2003年改題)

旧制第一高校校長として玉音放送に臨んだ日の前後から始まっている、安倍の戦後部分の自叙伝。安倍が亡くなる数年前までの記録であるが、学習院長として学校改革に臨む姿までは十分に描かれている。中国共産党に招待されて中国大陸に渡っても中国共産党の独裁体制には批判的記述を向けているなど、反共的記述が垣間見える。

#### 4.1.3.阿部次郎

東京帝国大卒、東北帝国大教授。専門は哲学・美学。安倍や和辻と同様夏目漱石・ケーベルに師事。『三太郎の日記』が教養主義の風潮にのっとり大ベストセラー&ロングセラーになった。雑誌『思想』の編集主幹になるなど安倍・和辻などと戦前の岩波書店経営に参加した一人である。

『三太郎の日記』(合本版)(第一巻が1914年、第二巻1915年、合本は新しく書かれた第三部を含めたもので1918年→1950年→1968年→1979年→2008年)

阿部次郎が青田三太郎という人物に仮託し、「人生はどう生きるべきか」悩んで日記にしたための思索の書として出版したもの。3冊本であり、のちに合冊された。ドイツ観念論的な思索の仕方をしており、これが真剣に人生や社会を考える手本として大将教養主義の風潮と合致して昭和戦後期に至るまでロングセラーとなった。

#### 4.1.4.津田左右吉

早稲田大学卒、早稲田大学教授。専門は日本史・東洋史。日中思想断絶論、仲哀天皇までの創作論（所謂欠史十三代説）など当時としては刺激的な論考で注目を集め、国士舘専門学校教授蓑田胸喜に不敬罪で訴えられたことで有名になった。戦後は尊王論を唱えて丸山たちの世代と対立した。

『シナ思想と日本』（1938年）

当時のアジア主義のベースである日中同祖論への反論として書いたもの。日本と中国は思想的に断絶した全く別の文明である、という内容であり、蓑田胸喜をはじめとする右派から反発を受けた。しかし、竹内好のような戦後の中国共産党を軸とした日中友好論にも反対の内容であり、その意味では左右のアジア主義双方から批判されうる内容でもある(古田(2004))。

#### 4.1.5.小泉信三

慶応義塾大卒、慶応義塾長を歴任。父小泉信吉は初代の慶応義塾長で、福沢諭吉の愛弟子でもある。小泉信三自身幼いころは福沢の家に住んだこともある。専門は経済学。師匠福田徳三と同様、自由主義経済学の立場から反共であったが、野呂栄太郎や羽仁五郎らマルクス主義者を学問的には認めていた。『共産主義批判の常識』がベストセラーに。

『共産主義批判の常識』（1949年→1954年改訂→1976年新版）

戦後の選挙で共産党が躍進したことに対する危機感から小泉が総合雑誌に投稿した論文をまとめたもの。共産主義者に対する政治的な批判ではなく、共産主義そのものの矛盾やマルクスたちの矛盾を指摘していったものであり、学問的な内容であるように心がけている。吉田茂ら保守政党側にも共産主義の批判内容が誤っているところや甘いところがあると苦言を呈しており、徹頭徹尾啓蒙主義的である。

## 4.2.各人物と書物・清水丸山世代

### 4.2.1.大塚久雄

東京帝国大卒、法政大学教授、東京大学教授、国際基督教大教授を歴任。専門は経済史。ウェーバーとマルクスを両立させる折衷主義の立場を採用し、左右双方から攻撃をされた。大塚史学と呼ばれる体系を築いた。主著は『社会科学の方法』『共同体の基礎論理』で、主な翻訳にウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。

『社会科学の方法』（1966年）

大塚の講演録・講義録に加筆を施し、まとめたもの。口頭で話したものが元になっているため、ですます調である。当時マルクス主義は経済学的に下部構造決定論、それに対し

てウェーバーは上部構造決定論とされていて対立するものであるとされていたが、大塚はこの両者を両立するものとして扱った。

#### 4.2.2.都留重人

旧制第八高等学校で反帝同盟事件を起こし除籍になったあと留学しハーバード大でPh.D習得。ハーバード時代はヨーゼフ・シュンペーターの指導を受け、同窓にはポール・サミュエルソンがいる。ハーバード大講師のとき日米戦が勃発し、交換戦で帰国。戦後片山内閣の下で経済安定本部総合調整委員会副委員長（次官級待遇）に就任、第1回経済白書である『経済実相報告書』を執筆したのち、一橋大教授、学長、明治学院大教授、朝日新聞論説委員を歴任。平和運動にも参加し、反自民党の立場をとった。専門は経済学で、現在でもマクロ経済学では教科書の最初に出てくる三面等価の原理を考案した。主著は『経済学はむずかしくない』、主な翻訳は『サミュエルソン経済学講義』。

#### 『経済学はむずかしくない』（1964年→1974年(第二版)）

当時の経済学の通説であるサミュエルソンの新古典派総合の立場に立ってミクロ経済学・マクロ経済学を解説した内容。ミルトン・フリードマン以後の経済学には対応していないものの、2008年のリーマンショック以後はフリードマン以前の経済学の有効性が再認識されつつあり（例えば、アベノミクスの第二の矢である財政政策は伝統的なケインズ政策である）<sup>45</sup>

#### 『日米安保解消への道』（1996年）

出版された年が村山政権直後であり、村山社会党の自衛隊合憲論・日米安保容認論を当時の首相橋本龍太郎と共に批判対象としている。アメリカ兵による少女暴行事件や当時の太田沖縄県知事による村山政権への反発、当時国防次官補であったジョセフ・ナイ<sup>46</sup>による国防・外交政策への批判が背景として存在する。都留の専門である経済学的な分析がある一方で、国際政治・国際法的記述は表面的なところと先見性に欠けるところ<sup>47</sup>とがある。

---

<sup>45</sup> ただし、若田部(2015)によれば経済政策提言者としての都留はケインズ的な財政金融政策に否定的であり、都留の弟子伊東光晴が現在ではアベノミクス批判の論陣を張っているようにその路線は現在でも継承されている。

<sup>46</sup> ジョセフ・ナイは国際政治学者としてはリベラリズムの立場を鮮明に出しているが、政府担当者としてはリベラリストとして日米同盟の強化を行いつつも中国や北朝鮮への対抗というリアリスト的な側面も打ち出している。デイビッド・ウェルチとの共著『国際紛争』では実務経験に於いてリアリズム・リベラリズム・コンストラクティビズム的要素はそれぞれ役に立つとしている。

<sup>47</sup> 例えば、都留は北朝鮮はソ連と違って脅威ではないと主張している。北朝鮮はこの段階でも既に核危機を起こしており、その後のミサイル発射や核実験を考えれば先見性がないと言わざるを得ない。もっとも、都留が生きてきた時代が進歩派全盛期であることを考えれば、一概に都留一人の責任によるものではない。

#### 4.2.3.宮城音弥

京都帝国大学文学部哲学科を卒業後、心理学を学びにフランスに留学。慶應義塾講師、東京大学講師、東京工業大教授、日本大教授などを歴任。専門は心理学であるが、超心理学と呼ばれる、一般的にはオカルトで扱われる分野も扱う。南博とともに戦後の心理学ブームを牽引した一人である。清水幾太郎とは旧制東京高校（現在の東京大学教育学部附属中等教育学校）で同期になり唯物論研究会を発足させてから生涯の親友であった。清水の平和問題研究会にも関与する。主著は『心理学入門』『超心理学の世界』『天才』などで、主な翻訳はカッシーラー『人間』。

##### 『新・心理学入門』（1981年）

当時の心理学のうち、基礎心理学部分を網羅したもの。宮城は1952年に岩波新書青版、1965年に岩波新書青版の第二版を『心理学入門』として出しているが、<sup>48</sup>本書は黄版として新たに出したものである。初版、第二版、となるにつれて個別テーマの新書を出すようになるにあたってそれらの部分を省略するようになった代わりに行動主義革命・認知革命以後の心理学の要素を増やしている。宮城による心理学統合の立場をよく表しているといえる。

#### 4.2.4.南博

東京帝国大学医学部を中退後京都帝国大文学部卒、更にコーネル大でPh.D取得。日本女子大講師、一橋大教授、成城大教授を歴任。専門は社会心理学。民主主義科学者協会（民科）に属するなど反自民党的で天皇制批判を学問上でも行った。石原慎太郎、加藤秀俊、高野悦子、山岸俊男、山本コウタローなどがゼミ出身者。主著は『日本人の心理』『社会心理学入門』『日本人論』で主な翻訳にオルポート『デマの心理学』マルクーゼ『エロスの文明』など。

##### 『日本人の心理』（1953年）

日本人の心理について、社会心理学的立場から解説したもの。ルース・ベネディクトの『菊と刀』に対する反論の意図もあり、日本人による日本人論という意図もある。終戦直後に書かれた本<sup>49</sup>であり、また南は反保守のイデオロギーを持っていることもあって全般的に「日本人はこういう心理を伝統的に持っているから、戦時中にこのような息苦しいこ

---

<sup>48</sup> 初版は『心理學入門』とあり、旧字体交じりのテキストになっている。

<sup>49</sup> 青木保(1990)によれば、日本の状況が悪い時は日本人は自虐的になり、高度経済成長で良くなれば日本的なものを肯定的に描くようになったという。南ものに『日本人論』(1994)で明治維新～現代の日本人論を網羅的に扱った本を書いた際ここには言及している。ただし、青木は淡々と記述的に書いているものの南は全般的に進歩派によるもの以外には批判的である。



とになった」という論調である。

#### 4.3.指標の当てはめ結果

指標の当てはめ結果は以下の通りである（表 4,5,6）。点数の付け方は、○が1点、×が0点とし（※がついた指標は逆に○を0、罰を1点とする）、?やなしをカウントしないようにした。各指標ごとの総得点を、○×の総得点/指標の数-?やなしとした指標の数、という形の分数で表現した。

| メディア知識人指標                     | 清水 | 丸山           | 和辻     | 阿部     | 安倍     | 津田     | 小泉     | 大塚          | 都留 | 宮城 | 南 |
|-------------------------------|----|--------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------------|----|----|---|
| 場（業界）の移動                      | ○  | ○            | ○      | ○      | ○      | ○      | ○      | ○           | ○  | ○  | ○ |
| ※場の移動へのためらいがある                | ×  | ○            | ×      | ×      | ×      | ×      | ×      | ×           | ×  | ×  | × |
| 移動した先での煽りによって学問の場の知名度向上（覇権戦略） | ○  | ×            | ○      | ×      | ×      | 無意識○   | ○      | ×           | ○  | ×  | × |
| 世の中全般の改革/転覆/迎合を狙う             | ○  | ○<br>（安保のとき） | ○      | ×      | ○      | ○      | ○      | ○           | ○  | ○  | ○ |
| ※煽りへのためらい                     | ×  | ○            | ×      | ○      | ×      | ○      | ×      | ○           | ×  | ×  | × |
| メディアに出ることが自己目的化               | ○  | ?            | ?      | ?      | ?      | ?      | ?      | ?           | ?  | ?  | ? |
| 変節漢であることを厭わない                 | ○  | ×            | ○      | ×      | ×      | ×      | ×      | ○           | ×  | ×  | × |
| 仲間をメディア・他の場に売り込む              | ○  | ?            | ?      | ?      | ○      | ?      | ?      | ?           | ?  | ?  | ○ |
| 時代/空気/世間に飲まれる                 | ○  | ○            | ○      | ×      | ×      | ×      | ×      | ○<br>（自己保身） | ×  | ×  | × |
| ちやほやされたい                      | ○  | ?            | ?      | ×      | ?      | ×      | ×      | ?           | ?  | ?  | ? |
| テレビへ肯定/テレビ出演                  | ○  | ×            | 時代的になし | 時代的になし | 時代的になし | 時代的になし | 時代的になし | ○           | ○  | ○  | ○ |

|                    |       |     |                   |     |     |     |     |     |     |     |     |
|--------------------|-------|-----|-------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| メディア知識人としての自己諧謔の精神 | ○     | ×   | ○<br>(特に古寺巡礼書き換え) | ×   | ?   | ×   | ×   | ×   | ?   | ?   | ?   |
| 総得点                | 12/12 | 3/9 | 8/8               | 2/9 | 5/8 | 4/9 | 5/9 | 6/9 | 6/8 | 5/8 | 6/8 |

表 4

|                        |     |     |     |     |    |     |     |     |     |     |     |
|------------------------|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 専門知識人指標                | 清水  | 丸山  | 和辻  | 阿部  | 安倍 | 津田  | 小泉  | 大塚  | 都留  | 宮城  | 南   |
| 当時の最先端を扱う/テーマのパイオニア    | ○   | ○   | ○   | ○   | ×  | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   |
| 学者になった後で専門分野集中時期有無     | ×   | ○   | ×   | ○   | ×  | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   |
| 当時の通説に貢献               | ?   | ○   | ○   | ○   | ×  | ○   | ○   | ○   | ○   | ?   | ?   |
| 辞典編纂                   | ×   | ×   | ×   | ×   | ×  | ×   | ×   | ×   | ○   | ○   | ○   |
| 専門学会・雑誌創設/個々の学会内部での影響大 | ×   | ○   | ○   | ×   | ×  | ×   | ?   | ○   | ○   | ○   | ○   |
| 専門分野での翻訳               | ○   | ○   | ○   | ×   | ×  | ×   | ×   | ○   | ○   | ○   | ○   |
| 総得点                    | 2/5 | 5/6 | 4/6 | 3/6 | 0  | 3/6 | 3/5 | 5/6 | 6/6 | 4/5 | 4/5 |

表 5

|                |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|----------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 公共知識人指標        | 清水  | 丸山  | 和辻  | 阿部  | 安倍  | 津田  | 小泉  | 大塚  | 都留  | 宮城  | 南   |
| 当時の分野総合        | ○   | ○   | ×   | ×   | ×   | ×   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   |
| 複数分野扱い成功       | ○   | ○   | ○   | ○   | ×   | ○   | ○   | ×   | ×   | ○   | ○   |
| 学界外とも広く交流      | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ×   | ○   | ○   | ○   |
| 啓蒙・教養主義的       | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   |
| 学界内部での派閥的動きと無縁 | ×   | ×   | ○   | ○   | ○   | ○   | ○   | ×   | ×   | ○   | ○   |
| 専門外での翻訳        | ○   | ×   | ×   | ×   | ×   | ×   | ×   | ×   | ×   | ○   | ○   |
| 総得点            | 5/6 | 3/6 | 4/6 | 4/6 | 3/6 | 4/6 | 5/6 | 2/6 | 3/6 | 6/6 | 6/6 |

表 6

次に、これらの根拠を挙げていく。

まずはメディア知識人指標についてである。

「場の移動」については、挙げた人物は全員総合雑誌に執筆経験があるため自明であり、皆○がつく。「場の移動に対するためらい」については、唯一丸山のみ竹内(2005)が挙げているため、丸山のみ×で他は○である。

「移動した先での煽りによって学問の場の知名度向上」については、社会学批判の本を執筆した清水(富永(2004),竹内(2012))、自分の専門分野の限界では評価が低かった和辻(竹内(2005))、自分の専門分野での実績が蓑田に因縁をつけられて火をつけられることで本人の意図にかかわらず結果的に炎上した津田、マルクス主義者と経済学で論争をした小泉、公害・環境問題や GNP 成長論で激しく近代経済学者と論争した都留の五人が、あくまで自分の専門分野上の話題をメディアを通じて論争的な素材として用いたということで該当し、五人が○で他は×である。

「世の中全般の改革/転覆/迎合を狙う」については、戦後にほとんど活動せず、政治にノータッチな阿部次郎以外、平和問題討議会（のち、平和問題談話会）に参加するなど何かしら関わっているため自明であり、阿部のみ×でそれ以外は皆○である。

「煽りへのためらい」については、そもそも煽りを実行していない阿部とためらいについて言及している丸山(竹内(2005))、あくまでアカデミー内部の話題にこだわった津田・大塚はためらいがあると考えべきあり、四人は×で他は○である。

「メディアに出ることが自己目的化」は、清水について竹内(2012)が指摘している○であるが、他が不明なので？とした。

「変節漢であることを厭わない」については、清水は竹内(2012)をはじめ様々なところで立場の変遷が語られている。和辻については苅部(1995)が日本否定西洋礼賛論者から日本礼賛論者への変遷、大塚は中野(2001)が戦前統制経済賛成論だったのが戦後リベラルにスライドしていったと、それぞれ指摘しているため該当し○であり、他はそもそも変節していないため×である。

「仲間をメディア・他の場に売り込む」については、安保闘争に参加した森田や香山などを育てた清水、岩波文化人のフィクサーとして動いた安倍、共産党系組織である民科に属し思想の科学研究会にも所属して後者に加藤秀俊を紹介した南（加藤(1982)）がそれぞれ該当するため○で、他は不明なので？とした。

「時代/空気/世間に飲まれる」については、竹内(2012)に指摘される清水、小浜(2012)に指摘される丸山、苅部(1995)に指摘される和辻、更に戦時中時局迎合をした大塚(中野(2001))がそれぞれ該当するため○であり、他は×とした。

「ちやほやされたい」については、竹内(2012)の指摘がある清水のみである○で、他は本人の意図としてメディア知識人をしてない阿部と津田、あくまで啓蒙目的で参入した小

泉を×とし、他は？とした。

「テレビへ肯定/テレビ出演」については、清水が『読書論』でテレビについて肯定的に書いているほか、大塚は『社会科学の人間』にまとめた内容がそもそも NHK テレビ講座の原稿に加筆したものであり、都留、宮城、南に至っては討論番組や専門家・解説者として登場しているためそれぞれ該当するため○であり、弟子の藤原弘達のテレビ出演に否定的であった丸山は×、他は時代的にテレビの時代について言及していないためなしとした。

「自己諧謔の精神」については、竹内(2012)の指摘がある。清水と、『古寺巡礼』の改訂の序文で初版の内容がアカデミック的でなく若気の至りであったため書き換えたと自供している和辻がそれぞれ該当し○とした。メディア知識人たろうとしなかった阿部・津田、啓蒙目的のみで参加した小泉、基本的にはアカデミー内部に留まった大塚、メディア知識人の業に警戒的であった丸山は×とした他は？とした。

次に専門知識人指標である。

「当時の最先端を扱う/テーマのパイオニア」については、清水は『社会学講義』で古典的なウェーバー・ジンメル・デュルケムだけでなくアメリカ社会学を取り入れて高く評価されていたこと（富永(2004),竹内(2012))、丸山が当時として最先端の政治学の科学化を推進しておりラスウェルなどの学説を紹介していたこと、和辻は戦前にニーチェの紹介をしたこと、阿部は遊女論について、津田は現在の通説の一部になっている失史十三代説を始めて唱えたこと、小泉は共産主義批判について、大塚はウェーバーとマルクスの経済論の折衷を、都留はハーバードでシュンペーターの経済成長論とサミュエルソンの新古典派統合を、宮城は戦後まもなくの段階でアメリカ流の行動主義心理学を、南はアメリカで最先端の社会心理学を扱っており、それぞれ該当するため○とした。唯一該当しない安倍のみを×とした。

「学者になった後で専門分野集中時期有無」については、丸山が学園紛争後東大教授を辞めた後から、阿部は東北帝国大学教授として専門分野に集中してから、津田は蓑田に攻撃されるまでの間、小泉は慶応義塾長を退任するまでの間、大塚は東大助手になってから、都留はハーバード講師に採用されてから日米捕虜交換船で帰国するまでと、宮城は東工大教授に就任以後、南は日本帰国後であり、それぞれ該当するため○とした。該当しない人物は×とした。

「当時の通説に貢献」については、丸山は日本ファシズム論で、和辻は風土論で、日本文化研究で、津田は欠史十三代説で、小泉はデイビッド・リカードの研究と共産主義批判論で、大塚はマルクスとウェーバーの折衷で、都留は三面等価の原理の考案でそれぞれ貢献しているため該当するため○とした。エッセイに専念した安倍は×とし、不明確な清水・宮城・南は？とした。

「辞典編纂」については、都留が岩波の『岩波小辞典・経済学』を、宮城が同じく『岩波小辞典・心理学』を、南が河出新書『現代心理学用語辞典』をそれぞれ編集しているた

め該当し、○とした。他は×とした。

「専門学会・雑誌創設/個々の学会での影響大」については、丸山は日本政治学界で大きな影響力を持ち、和辻は日本倫理学会を創設しており、大塚は西洋経済史において一学派を築き、都留は岩波書店から雑誌『環境と公害』を出版しており、宮城と南は日本心理学会の戦後再建に貢献しており、更に南は日本社会心理学会の理事に三度なっているためそれぞれ該当するため○とした。他は×とした。

「専門分野での翻訳」については、清水はジンメルやウェーバー、丸山はG・H・セイバイン、和辻はニーチェやバーナード・ショー、大塚はウェーバー、都留はサミュエルソンやシュンペーター、ガルブレイスなどを、宮城はシャルル・ブロンデルなど、南はオルポートなどをそれぞれ訳しており該当するため○とした。他は×とした。

最後に公共知識人指標である。

「当時の分野総合」については、清水はアメリカ社会学とヨーロッパ社会学の統合を、丸山は当時の現代政治学（ラスウェル）と古典的な政治思想史の統合を、小泉は近代経済学とマルクス経済学を共に深く学んだうえで双方を学問的に同時に扱っており、大塚は日本のマルクス経済学における労農派・宇野派を除く講座派・ウェーバー社会学との統合を自らの信念であるキリスト教信仰と共に総合し、都留はマルクス経済学と近代経済学の統合を行い、宮城は心理学の各国の流れと各テーマの総合を、南は社会学的な社会心理学と心理学的な社会心理学とをどちらも扱っている所以他们がそれぞれ該当する。

「複数分野扱い成功」については、清水は社会学だけでなく社会心理学・倫理学などを扱っており、丸山も政治学だけでなく歴史学などを扱っていて、和辻は哲学とその関連分野だけでなく政治思想家も担い、阿部は哲学・美学、津田は歴史学と思想、小泉は経済学だけでなく福沢諭吉論や福沢の『帝室論』など、宮城は心理学だけでなく唯物論、南は留学中は実験心理学中心だったものの、文化論にシフトしていったためそれぞれ該当するため○とした。他は×とした。

「学界外とも広く交流」については、清水や宮城は戦前に海軍の研究施設で仕事をしており、和辻・阿部・安倍は夏目漱石に文学の弟子として師事し、阿部は角川源義と交流し、和辻と安倍は終戦工作に参加して、津田も平和問題談話会に参加し、小泉は当時の東宮（現在の天皇）の教育係を務め、都留は戸外問題に取り組んでその先頭に立っており、南は共産党にかかわっているため、それぞれ該当し○とした。唯一該当しない大塚を×とした。

「啓蒙・教養主義的」については、何れも教養メディアとしての雑誌に対一般人向けに執筆したことがあるので全員該当するため○とした。

「学界内部での派閥的動きと無縁」については、戦後はオールド・リベラリストの岩波書店からの締め出しを吉野源三郎と共に行いつつ、安保闘争の頃からは丸山ら進歩派とも対立した清水はもちろん、極めて権威主義的な態度をとることもあった丸山（羽生(2008)）<sup>50</sup>、

<sup>50</sup> 羽生によれば、大塚久雄が梶山力との共訳だったウェーバーの『プロテスタンティズム

自らは講座派の歴史観を採用して労農派と激しく争った大塚、経済学の内部で反成長論の立場を明確にして公害問題を論じる集団を作った都留が×に該当する。他は○とした。

「専門外での翻訳」については、イギリス人外交官にして国際政治学者・ロシア史研究者 E・H・カーの『歴史とは何か』を、社会学が専門にもかかわらず訳した清水、新カント派の哲学者カッシーラーの『人間』を、心理学が専門にもかかわらず訳した宮城、フランクフルト学派哲学者マルクーゼの『エロスの文明』を、社会心理学が専門にもかかわらず訳した南がそれぞれ該当するため○とした。他は×とした。

## 5. 考察

### 5.1. 指標ごとの数値グラフ化

まず単純に、指標ごとの数値をグラフ化して表示することとする。その結果は以下の通りである(図 5,6,7)。

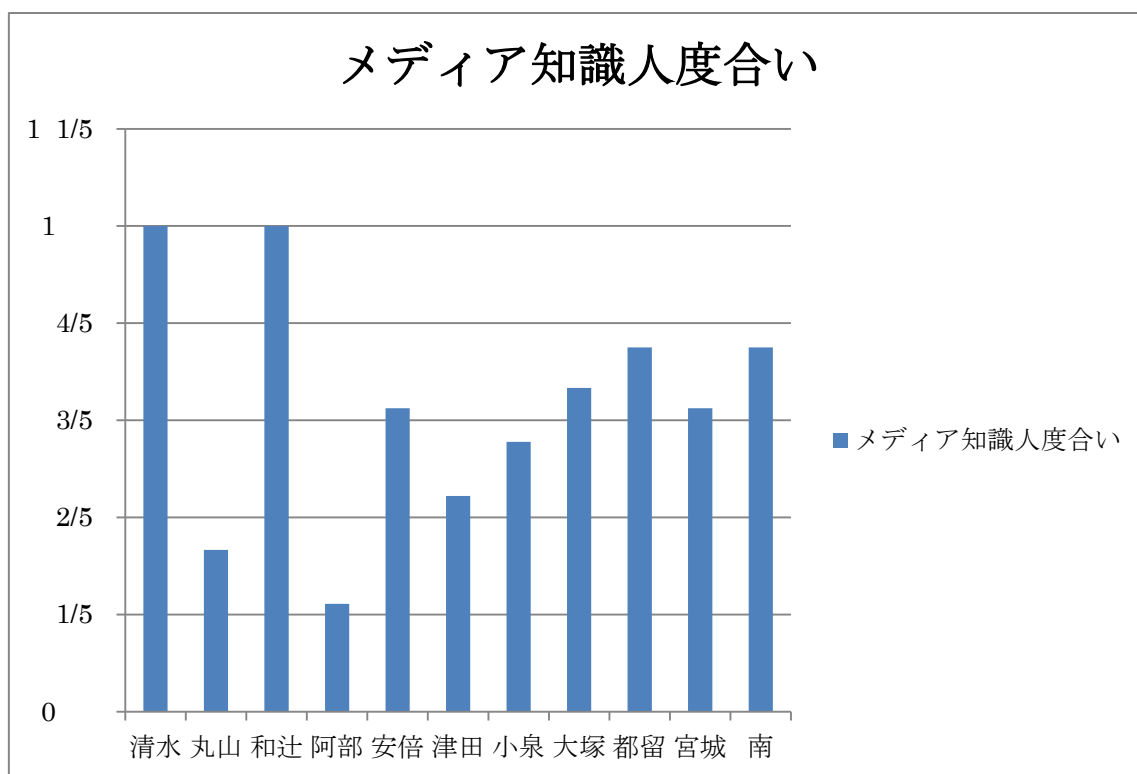


図 5

の倫理と資本主義の精神』を大塚単独訳としたのを、ウェーバー研究者の安藤英治が梶山訳の再評価を行うために復刻を企画した際、安藤に対して丸山が圧力をかけてやめさせようとしたという。

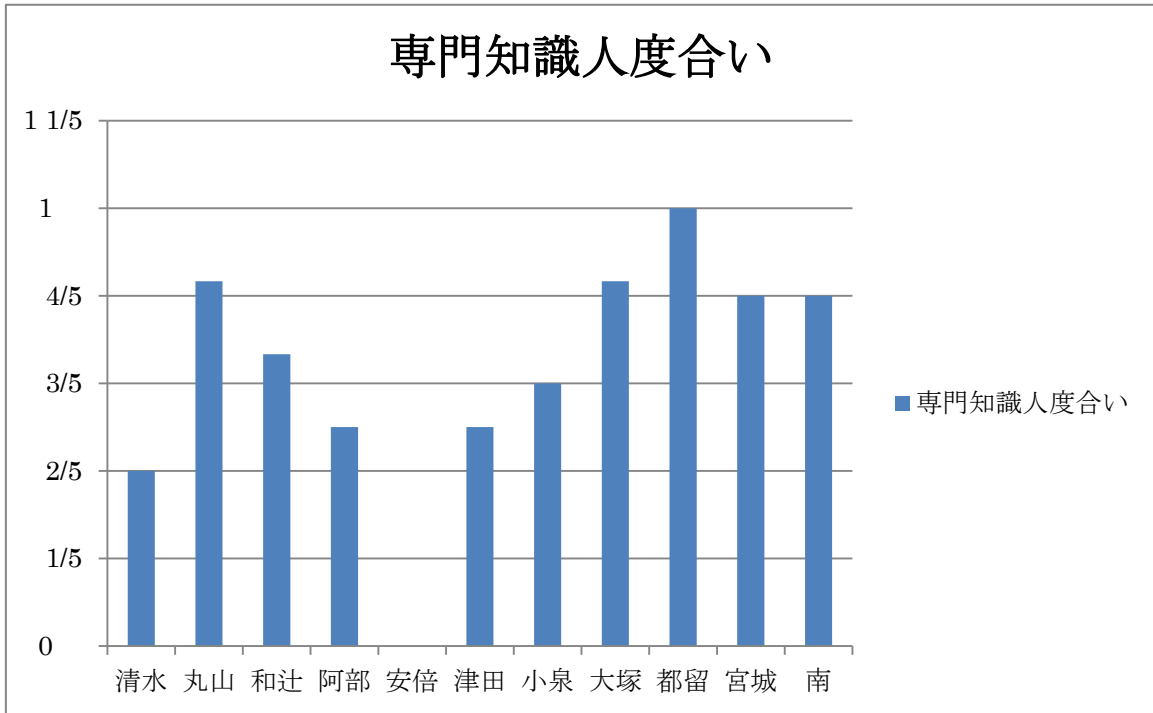


図 6

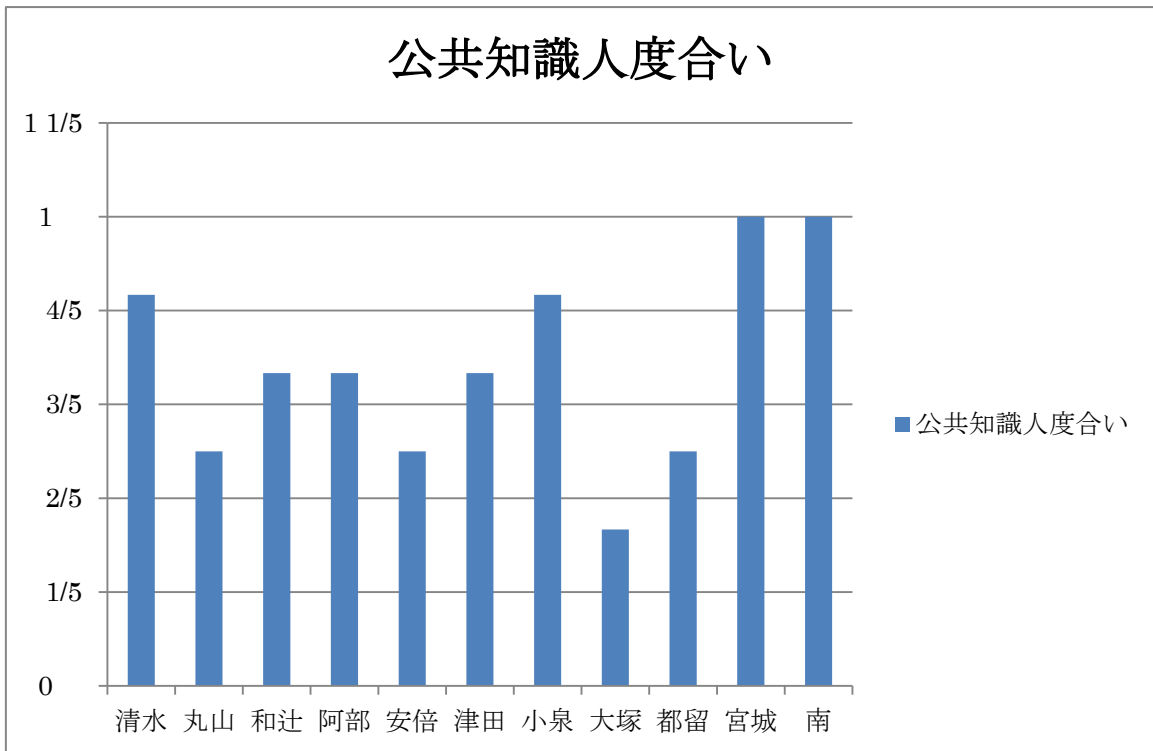


図 7

また、これらのグラフを同時に表示したものは以下のようなになる(図 8)。

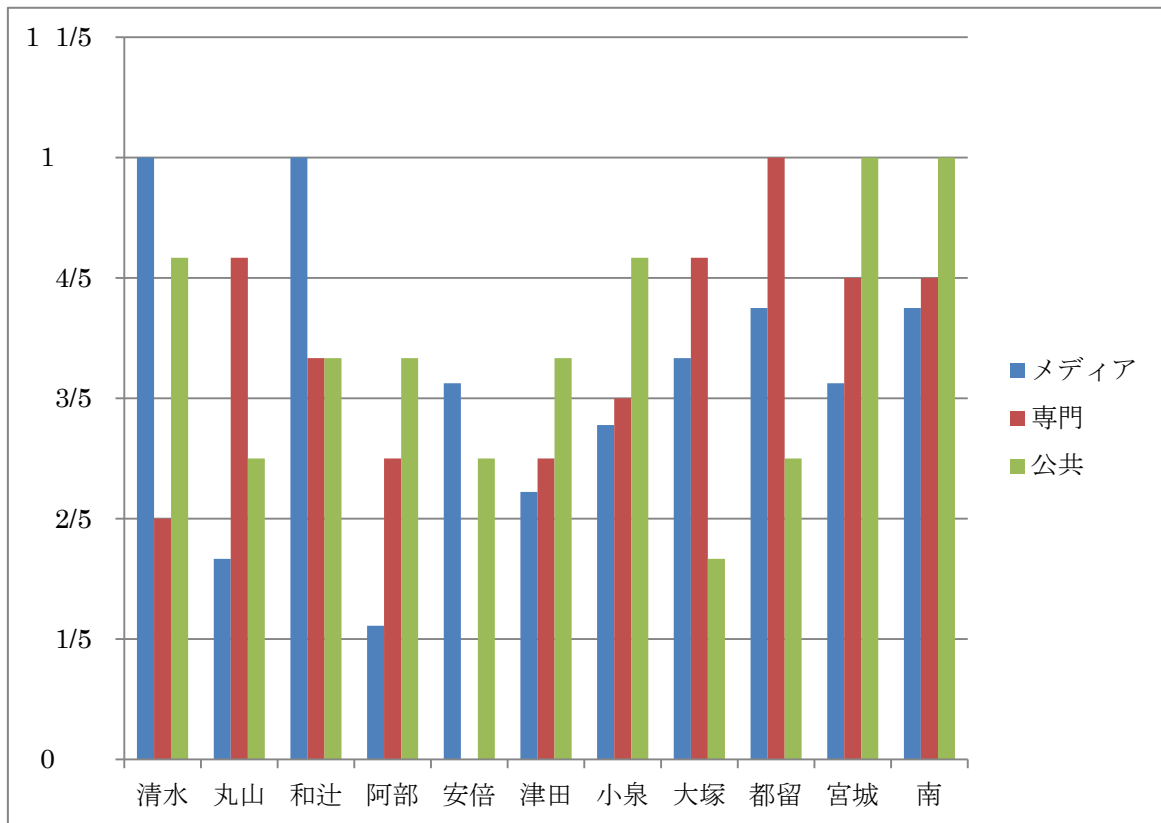


図 8

上記のグラフを見て何が言えるかの分析に当たっては、各知識人個人の属性やそのほかのデータと照らし合わせる必要があるが、最初にグラフだけで言えることを指摘する。

メディア知識人度合いのグラフからは、阿部が最も低く、次に丸山が低いということと逆に清水と和辻が満点であるということである。残りの人物の数値は近接しており 2/5 から 4/5 の点数の間に収まる、その中では都留と南が高く、津田と小泉が低めで安倍・大塚・宮城がほぼ同じである。

専門知識人度合いのグラフからは、安倍がゼロであることと清水・阿部・津田が低く小泉も津田より少し高い程度であることが読みとれる。都留は満点であり、丸山・大塚・宮城・南は次いで高い。

公共知識人度合いのグラフからは、大塚が最も低く、丸山や安倍・都留が中間であり次に低い。宮城と南は満点であり、清水と小泉も高い。和辻・阿部・津田がやや高いという立ち位置にいる。

三つの指標を同時に比較しているグラフを最後に見ることにする。このグラフを、メディア知識人度合いが近い者同士でグルーピングを行い、そのグループ内での専門知識人度合いと公共知識人度合いとの違いを比べるという作業をするとわかりやすくなる。メディア知識人度合いが突出して高いのは清水と和辻であるが、清水と和辻の専門知識人度合い



は差があり清水は和辻に比べるとがやや低い。一方で和辻は清水よりも公共知識人度合いが低い。逆にメディア知識人度合いが低い丸山と阿部を比較すると、丸山は阿部に比べて専門知識人度合いで大きく差をつけている一方で公共知識人度合いがやや低い。最後に、メディア知識人度合いがほぼ接近している安倍・津田・小泉・大塚・都留・宮城・南を比較すると、大塚・都留・宮城・南は何れも専門知識人度合いが高いが、大塚・都留は公共知識人度合いが低く宮城・南は公共知識人度合いも高い。安倍は専門知識人度合いがゼロであり、津田と小泉は二人とも中間付近である。そのうえで公共知識人度合いが小泉・津田、安倍の順に高い。

## 5.2.属性リスト

考察のために今回扱った知識人の属性データと学者としての業績をまとめた表(表 7)を提示する。

| 属性データ       | 清水    | 丸山     | 和辻            | 阿部            | 安倍            | 津田   | 小泉            | 大塚    | 都留                       | 宮城    | 南          |
|-------------|-------|--------|---------------|---------------|---------------|------|---------------|-------|--------------------------|-------|------------|
| 生年          | 1907  | 1914   | 1889          | 1883          | 1883          | 1873 | 1888          | 1907  | 1912                     | 1908  | 1914       |
| 没年          | 1988  | 1996   | 1960          | 1959          | 1966          | 1961 | 1966          | 1996  | 2006                     | 2005  | 2001       |
| 出身地         | 東京    | 東京     | 兵庫            | 山形            | 愛媛            | 岐阜   | 東京            | 京都    | 東京                       | 東京    | 東京         |
| 文化勲章        | ×     | ×      | ○             | ×             | ×             | ○    | ○             | ○     | ×                        | ×     | ×          |
| 最終学歴        | 東京帝国大 | 東京帝国大  | 東京帝国大         | 東京帝国大         | 東京帝国大         | 早稲田  | 慶応            | 東京帝国大 | ハーバード                    | 京都帝国大 | 京都帝国大→コーネル |
| 専門分野        | 社会学   | 政治学    | 倫理学           | 美学            | 哲学            | 歴史学  | 経済学           | 経済学   | 経済学                      | 心理学   | 社会心理学      |
| 指導教員        | 戸田貞三  | 南原繁    | 井上哲次郎         | 井上哲次郎         | 井上哲次郎         | 白鳥庸吉 | 福田徳三/<br>堀江帰一 | 本位田祥男 | シュンペーター                  | 野上俊夫? | ダレンバック     |
| その他影響を与えた人物 | 三木清   | 長谷川如是閑 | ケーベル/<br>夏目漱石 | ケーベル/<br>夏目漱石 | ケーベル/<br>夏目漱石 |      | 福沢諭吉          | 内村鑑三  | サミュエルソン/<br>ノーマン/<br>ホワイ |       |            |

|                  |                        |   |                 |        |        |             |           |                      |              |               |                              |
|------------------|------------------------|---|-----------------|--------|--------|-------------|-----------|----------------------|--------------|---------------|------------------------------|
|                  |                        |   |                 |        |        |             |           |                      | ト            |               |                              |
| 主なキャリア (大学教授ポスト) | 学習院大学教授                | 東大教授                                    | 東大教授            | 東北大教授  | 学習院長   | 早稲田大学教授     | 慶応義塾塾長    | 東大教授                 | 一橋学長         | 東工大教授         | 一橋教授                         |
| 主な弟子・直接影響を与えた人物  | 高根正昭、香山健一、森田実、中嶋嶺雄、藤竹暁 | 藤田省三、神島二郎、橋川文三、松下圭一、藤原弘達、坂本義和、松本三之介、渡辺浩 | 吉沢伝三郎、湯浅泰雄、勝部真長 |        |        | 栗田直躬、福井康順   | 今村武雄、気賀健三 | 関口尚志、山之内靖            | 伊東光晴         | 穂山貞登          | 加藤秀俊、石原慎太郎、高野悦子、山本コータロー、山岸俊男 |
| 政治イデオロギー         | マルクス主義 → プラグマティズム → 軍国 | 平和主義的近代啓蒙主義                             | 近代啓蒙主義 → 伝統主義   | 近代啓蒙主義 | 近代啓蒙主義 | 反アジア主義・尊王主義 | 自由主義      | 統制経済主義 → 平和主義的近代啓蒙主義 | 平和主義・親マルクス主義 | 平和主義・反スターリン主義 | 平和主義・親マルクス主義                 |

|        |   |   |                                     |          |                  |                                    |                                      |                                      |                             |  |                       |  |
|--------|---|---|-------------------------------------|----------|------------------|------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------|--|-----------------------|--|
|        | 主義<br>→ 平<br>和主義<br>→<br>右翼               |   |                                     |          |                  |                                    |                                      |                                      |                             |  |                       |  |
| 代表作    | 『流言蜚語』<br>『社会学講義』<br>『論文の書き方』<br>『倫理学ノート』 | 『日本の思想』<br>『現代政治思想と行動』<br>『日本政治思想研究』<br>『文明論之概略を読む』 | 『古寺巡礼』<br>『倫理学』<br>『風土』<br>『日本倫理想史』 | 『三太郎の日記』 | 『岩波茂雄伝』          | 『神代史の研究』<br>『日本古代史研究』<br>『シナ思想と日本』 | 『共産主義批判の常識』<br>『読書論』<br>『海軍主計大尉小泉信吉』 | 『社会科学の方法』<br>『社会科学の人間』<br>『共同体の基礎理論』 | 『経済学はむずかしくない』<br>『近代経済学の群像』 | 『心理学入門』<br>『夢』<br>『精神分析入門』<br>『天才』<br>『性格』<br>『超能力の世界』 | 『日本人の心理』<br>『社会心理学入門』 |  |
| ヒットはじめ | 三木清による引っ張り                                | 『超国家主義の論と心理』  | 『古寺巡礼』                              | 『三太郎の日記』 | 岩波文化人のコア化、高校長・文部 | 蓑田喜らによる訴訟                          | マルクス主義者の論争                           | 『プロ倫』翻訳、『社会科学の方                      | 第一回経済白書執筆                   | 『心理学入門』  | 『日本人の心理』              |  |

|         |  |                                   |   |  |   |   |                    |  |   |                              |                                     |
|---------|--|-----------------------------------|---|--|---|---|--------------------|--|---|------------------------------|-------------------------------------|
|         |  |                                   |   |  | 大臣<br>就任  |   |                    | 法』   |   |                              |                                     |
| 炎上・煽り実績 | 戦前<br>→社会学<br>批判<br>戦中<br>→軍国主義<br>礼賛<br>戦後<br>→平和運動・<br>砂川・安保<br>闘争指導者<br>→核武装論 | 反軍国主義論<br>→安保闘争<br>→学生紛争<br>で殴られる | 戦前<br>→大正デモ<br>クラシ<br>ー論<br>→軍国主義<br>礼賛<br>戦後<br>→象徴天皇<br>支持<br>→皇室擁護 |  | 戦前<br>→自由主義<br>勢力<br>戦後<br>→オール<br>ド・リ<br>ベラ<br>リス<br>ト<br>世代<br>として<br>若手<br>と論争 | 戦前<br>→蓑田<br>訴え<br>られ<br>た<br>文<br>部<br>省<br>に<br>よ<br>り<br>教<br>授<br>辞<br>職<br>戦<br>後<br>→皇<br>室<br>擁<br>護 | 共産主義<br>批判・<br>尊王論 | 折衷主義<br>採用の<br>ため左<br>右双方<br>から批<br>判され<br>る | 戦前<br>→反軍国<br>主義で<br>旧高<br>校追<br>放<br>戦後<br>→平和<br>運動<br>一方<br>で赤<br>狩り<br>の被<br>害に<br>遭い<br>自供<br>し同<br>志ノ<br>マン<br>自<br>殺 | 平和<br>運動・<br>スター<br>リン主<br>義 | 平和<br>運動・<br>民科<br>参加・<br>反保守<br>主義 |

表 1

### 5.3.竹内類型の代入

この中で先行研究である竹内が『メディアと知識人』で重要視したのは学歴と生まれ育ちである。竹内の分類は以下のようにまとまる(表 8)。

|                |                  |                  |
|----------------|------------------|------------------|
| 竹内の分類          | 帝大以外卒（学歴資本－）     | 帝大卒（学歴資本＋）       |
| 山の手育ち（文化資本＋）   | 象限Ⅱ 傍系（ex 鶴見）    | 象限Ⅰ 正系（ex 丸山）    |
| 下町・地方育ち（文化資本－） | 象限Ⅳ 傍系的傍系（ex 吉本） | 象限Ⅲ 正系的傍系（ex 清水） |

表 2

帝国大学系列はエリートの中でも本流であり、鶴見の卒業したハーバードや吉本の卒業した東工大などは本流から外れた存在であると竹内は見なしている。また、育ちは教育水準が高い山の手と低い下町を対比している。竹内はそれぞれの証言に該当する人物を一人ずつ挙げており、丸山・鶴見・清水・吉本を当てはめている。この四人の大衆論を比較しながら、清水と吉本は大衆寄りであり大衆を理解していて、鶴見は大衆に対して片思いをしており、丸山はそもそも大衆を理解する気もないとしている。ただし、清水が過激な立場を行き来したことについて竹内は「東大教授になれなかったこと」も同じ本の中で挙げており、育ちと明確に分けているわけではない。

そこで、本研究では育ち・卒業した大学以外にどの大学で専任になれたかというキャリアを考慮することとする。以下の表(表 9)では、「育ち」が東京の山の手地区のみ＋、下町や地方を－で表し、出身校は旧帝国大学を＋、それ以外を－とし、キャリアを旧帝国大教授になれた場合＋、そうでない場合を－とした。なお、ここでは旧制第一高校校長は東大教授相当とみなし＋と判定した。

|    | 育ち     | 出身校        | キャリア            |
|----|--------|------------|-----------------|
| 清水 | －（下町）  | ＋（東京帝国大）   | －（学習院教授）        |
| 丸山 | ＋（山の手） | ＋（東京帝国大）   | ＋（東大教授）         |
| 鶴見 | ＋（山の手） | －（ハーバード）   | －（同志社教授）        |
| 吉本 | －（下町）  | －（東工大）     | －（フリーランス）       |
| 和辻 | －（地方）  | ＋（東京帝国大）   | ＋（東大教授）         |
| 阿部 | －（地方）  | ＋（東京帝国大）   | ＋（東北大教授）        |
| 安倍 | －（地方）  | ＋（東京帝国大）   | ＋（一高校長、京城帝国大教授） |
| 津田 | －（地方）  | －（早稲田大）    | －（早稲田大教授）       |
| 小泉 | ＋（山の手） | －（慶應義塾大）   | －（慶應義塾長）        |
| 大塚 | －（地方）  | ＋（東京帝国大）   | ＋（東大教授）         |
| 都留 | －（地方）  | －（ハーバード）   | －（一橋学長）         |
| 宮城 | ＋（山の手） | ＋（京都帝国大）   | －（東工大教授）        |
| 南  | ＋（山の手） | ＋（京都帝国大→コ） | －（一橋大教授）        |

|  |  |       |  |
|--|--|-------|--|
|  |  | ーネル大) |  |
|--|--|-------|--|

表 3

竹内は清水と吉本のラディカルさと、丸山と鶴見の大衆像の偏りを育ちに求めた。では果たして、育ちが+であればメディア知識人度合いは低く、-であれば高いのかと言えば必ずしもそうではない。確かに、清水や和辻は高いが阿部は丸山よりも低い。また、+と-が逆のはずの津田と小泉、都留と宮城がそれぞれ同じ数値である。また、和辻の次に高いのが大塚、次いで僅差で南と続くため、清水や和辻の高さはパーソナリティかほかの生成消滅過程の変数を理由に求める方がよい。

では、清水も吉本も共に-がつくキャリアはどうであろうか。これも、メディア知識人度合いでは和辻は清水に並ぶ満点でありながらキャリアは東大教授である。また、安倍と津田・小泉のメディア知識人度合いはかなり近接している。丸山と阿部の低さを、キャリアを理由にするのは難しく、これもパーソナリティかほかの生成消滅過程の変数によるものであると考えることが出来る。

以上のことから、竹内がメディア知識人度合いの要因と見なしていた育ちや帝大か私学か他かといったキャリアについては必ずしも相関しないことが判明した。少なくとも個人のパーソナリティかほかの生成消滅過程の変数の影響を考えるべきである。

そのため、各個人のパーソナリティか、それとも生成消滅過程の変数か、どれが大きな影響を持っているかを各個人のエピソードを定性的に調べていくことで調査する必要がある。そのうえで、竹内・ブルデューの枠組みで分析しきれなかった代わりに更に何が言えるかを見出していく。

## 5.4.各知識人の実際

### 5.4.1.清水幾太郎

清水幾太郎の指標的メディア知識人度合いは指標の設定上最高値である。清水のいかにもなメディア知識人さを表すエピソードとしては、以下のものが挙げられる。

- ・メディアの露出度高い（最も売れる学者、映画にも出演）
- ・テレビにも好意的（『本はどう読むか』ではマクルーハンにも高評価）
- ・砂川闘争/安保闘争の指導者
- ・メディアの世界に於いて、政治の主張が一貫していない（マルクス主義で社会学批判→プラグマティズム・社会学→戦争支持→反戦→右旋回）
- ・扇動し（現在の「敵」権力批判）、ためらいはなく転覆を狙う
- ・政治闘争をアカデミー内部へ持ち込み、更にこれをメディアに持ち込むことも躊躇しない<sup>51</sup>

<sup>51</sup> 竹内は『メディアと知識人』で、平和運動懇談会での清水が腹を立てている様子を紹介している。当時の憲法学における通説を形成している憲法学者宮沢俊儀、当時の民法学に

- ・メディア露出が自己目的化している
- ・ちやほやされたいという欲求（愛情乞食）に飢えている
- ・自己諧謔の精神まで持っている
- ・グループを作り売り込みも行う（香山健一、森田実、高根正昭、中島嶺雄、中川八洋などをプロデュース（自身も三木清によってデビュー））

一方で、専門知識人度合いは指標上そこまで高くない。辞書の編纂や学会での影響力と  
いった指標に引っかけられないからである。にもかかわらず、以下のような評価はある。

- ・社会学・社会心理学・プラグマティズムで最先端の理論を扱う
- ・当時における社会学者の第一人者という扱い
- ・戦時中は政府の仕事（地政学本の翻訳など）を請け負う
- ・現在、内容の質の良さから『流言蜚語』『愛国心』などが復刊される
- ・東大時代の指導教員戸田貞三<sup>52</sup>からは知識量を褒められる

以上の評価を考えれば、清水の専門知識人としての腕は十分<sup>53</sup>であると思われる。それでも指標ではカウントされないのはひとえに清水の行動スタイル故である。

最後に、公共知識人度合いは比較的高い。以下のようなエピソードがそれらを物語っていると言える。

- ・戸田とはそりが合わず、1920年代以降は専門知識人を批判し続けた三木に可愛がられた
- ・社会学文献を英独仏どれも訳し、歴史学や哲学の本も翻訳を手掛ける
- ・専門分野である社会学・社会心理学以外の文献も多数出版し、特に岩波の『倫理学<sup>54</sup>ノート』は評価が高い<sup>55</sup>

以上の事柄をまとめれば、「一流の学者にしてメディア知識人の王者」であると清水を表

における通説を形成している民法学者我妻栄を岸信介ら自民党政権に取られてしまうと憲法改正のための法的整備が進んでしまうという状況があり、宮沢は戦後直後まで明治憲法のままで良いという立場であった人物であり、我妻は岸とは東大時代の同級生で仲が良かった人物である。最悪の場合、岸に奪われかねない人物たちである。そこで、丸山眞男や辻清明ら東大法学部のリベラル派の教授は宮沢と我妻を宝物のように扱い清水は蚊帳の外であったという。

<sup>52</sup> 清水は戸田のもとで東大助手を二年間やるも、実証的な家族社会学を地道に行う戸田とはそりが合わず、戸田から研究室を出ていくように言われてしまう。

<sup>53</sup> 庄司(2015)によれば、清水幾太郎はコントとデューイという二人の全く異なる人物から影響を受け、コント＝普遍・一般、デューイ＝経験・実践として清水の中で消化され両者の間を揺れながら独自の思想を練り上げたという。

<sup>54</sup> 倫理学は哲学の中の道徳哲学に近く、メタ倫理学も含めて清水の扱う社会学と親和的な要素はある。

<sup>55</sup> しかし、立場上ムーアの倫理学をケンブリッジ流の育ちの良さがあるとして批判する内容であるため、論者によっては真逆の評価になることもある（例えば、森村(2015)）。

現することが出来る。専門知識人・公共知識人としても成功したうえで転覆戦略を華麗にこなす清水は学者とメディア知識人の王者を両立させることが出来た稀有な人物である。

#### 5.4.2.丸山眞男

清水とは逆に、指標上のメディア知識人度合いは低い。以下のエピソードで確認する。

- ・学界中心で新書や総合雑誌などはサブ（「本店」と「夜店」）と晩年では主張
- ・実際は戦後の60年代頭まで雑誌や地方紙などに多く寄稿<sup>56</sup>
- ・テレビを批判するなど、より大衆向けのメディアに批判的<sup>57</sup>
- ・政治思想はほぼ一貫的であった
- ・平和運動に参加した
- ・安保闘争前後まで大学生に非常に人気であり、学界でも大きな勢力を持ったため、学者コミュニティ内部での転覆戦略を採用する必要がなかった
- ・一方、安保闘争時に岸信介内閣に対して権力闘争をしかけた
- ・安保の空気に飲まれた（小浜(2012)）以外、煽り方は抑制的で煽りの問題をよく理解していた
- ・吉本隆明などの批判者には無視で対応する戦略<sup>58</sup>（丸山のノートをまとめた『自己内対話』（1998）ではこうした批判者や新左翼への激しい嫌悪が読み取れる）
- ・大衆に嫌われる<sup>59</sup>

以上を見ていった限りでは、実は丸山は世間のイメージ通り活躍していったという側面が指標とは逆に浮かび上がってくる。場の移動や煽りに対するためらいがあるなど、様々な指標的なメディア知識人度合いを避ける珍しい人物ではあるものの、それは逆に言えば

---

<sup>56</sup> 丸山は「専門家による夜店としてのプロパガンダ」という形式が最もプロパガンダとして有効と認識している。単に慎重なだけでなく、状況を読んだ上で効果的な手出しも組み合わせる戦略的なしたたかさがうかがえる。

<sup>57</sup> 一方で、兄は戦前からNHKプロデューサーで紅白歌合戦の主催をする人物で、弟もジャーナリストとして有名である。更に、父親はジャーナリスト丸山幹治であり、ジャーナリスト長谷川如是閑の弟子と丸山本人が認識しており、更に東大総長の立場でサンフランシスコ平和条約批判論を述べたことで時の吉田茂首相から「曲学阿世の徒」と非難された南原繁の弟子でもある。丸山は政治思想を学ぶことで自制的であろうとしつつ一方で政治に興奮しながら冷静に対処ができる戦略家でもある、という何重にも重なった複雑な様相である（荻部(2006)）。

<sup>58</sup> 丸山のノートをまとめた『自己内対話』（1998）ではこうした批判者や新左翼への激しい嫌悪が読み取れる。公的には無視をするのが得策であると判断し実行していても、内心堪えるものがあったということである。

<sup>59</sup> 『自己内対話』では、新左翼の文学部院生が丸山に対して「そろそろ殴っちゃおうか」「ヘン、ベーターヴェンなんかききながら、学問をしやがって！」と叫んだエピソードを丸山は紹介している。1932年の5・15事件の時の犬養毅首相の「話せばわかる」に対する青年将校の「問答無用！」によく似た、生の大衆感情の爆発を目の前にさらけ出されて丸山は大いに動揺した。戦前丸山は警官や朝鮮人兵から殴られるが、丸山は権力・ファシズムの問題であると過小評価していた。



煽る行動をいざ実行したときの効果を最大限高めるテクニックであり、本当は大衆に嫌われていてしかも大衆を理解していないという、大衆動員を清水のように常時やっていくことは不向きな存在であるということが関係している。

それに対して専門知識人度合いは指標上高い。

- ・本業は日本政治思想と認識し、学園闘争前後からこれに集中
- ・日本政治思想をはじめて体系化したパイオニア
- ・学会で強い影響力

メディア知識人度合いとも合わせると、指標上のメディア知識人度合いを回避する代わりに専門知識人として努力しようとしていたことが伺える。家は父丸山幹治、父の親友長谷川如是閑、兄がNHKに入社した芸能プロデューサー丸山鉄雄、弟が雑誌編集者・評論家の丸山邦男、大学の恩師は時の吉田茂首相に「曲学阿世の徒」と非難された南原繁<sup>60</sup>であるなど、メディア知識人そのものの家庭環境・社会環境であり、メディア知識人的な動き方に精通しているからこそできる動きであるともいえる。

公共知識人度合いは半分であり、数値上はそこまで高いわけではない。しかし、エピソードとしては以下のことが言われている。

- ・政治学全般について一通り学び、これらを啓蒙（『政治の世界』など）
- ・音楽もクラシック好きであり、教養主義的<sup>61</sup>
- ・政治学以外の分野からも貪欲に学ぶ（ウェーバー社会学など）

以上を考えると、数値がそこまで高くなくても十分に公共知識人らしさはあったと見なせる。これらをまとめれば、丸山は「メディア知識人の役割の使い分けを行う戦略家」ということが出来る。竹内が丸山のことを「地味・慎重戦略」と評していたが、丸山の場合は慎重に慎重を重ねつつも、通常「地味・慎重戦略」の目的である守りの態勢というよりはむしろ攻めを念頭に置いていたものであると言える。

### 5.4.3.和辻哲郎

指標的メディア知識人度合いは清水と同様満点である。このことは、以下のエピソードからも容易にわかる。

- ・エッセイ中心で直観主義であるため<sup>62</sup>、メディア向き

---

<sup>60</sup> 南原繁は当時東大総長ながら吉田が締結したサンフランシスコ平和条約に対して、丸山らと同様に片面講和に過ぎないと批判していた。ソ連が崩壊した今日目からすれば吉田の方が正しかったと思われるが、当時に於いては南原や丸山らの主張にも現実性があった。

<sup>61</sup> 上記の註にも関係するが、クラシック音楽を聴くような人物は通常文化資本が高く教養主義的であると見なされる。

<sup>62</sup> 特に『古寺巡礼』の初版は、新版で削られたよりダイレクトな感覚主義的な表現が満載である。

- ・和辻本人も認める直情的性格<sup>63</sup>
  - ・政治的批判も実践<sup>64</sup>
  - ・岩波の雑誌の発起人・編集者を経験
  - ・安倍能成・西田幾多郎らとケーベル・夏目・岩波・京都学派人脈の一角を形成し、戦後もオールド・リベラリスト世代重鎮
  - ・日本に対するスタンスが変動<sup>65</sup>
  - ・『古寺巡礼』の書き換えの際、メディア知識人的な自己諧謔の精神がみられる。
- 直情的性格や政治的实践という点を考慮しても清水幾太郎に近い。では、他の指標はどうなのであろうか。

専門知識人度合いは指標上はそこそこ高い。しかし、エピソードを調べると単純にそうとも言えないようなものも出てくる。

- ・哲学・倫理学分野で当時の学会では実直と評価されず<sup>66</sup>
- ・東大での指導教員で官僚的秀才<sup>67</sup>の井上哲次郎から嫌われる<sup>68</sup>
- ・大学を出た直後にニーチェやキルケゴール論を展開し、実存主義哲学論のパイオニアになった<sup>69</sup>

和辻は東京大学教授になれたものの、実直な哲学研究者とは必ずしも合わなかったようである。

公共知識人度合いは指標上そこそこ高い。

- ・和辻の文章自体が流行し、古典にもなる
- ・以上の意味を勘案すると、哲学学者ではなく哲学者

和辻のことを表現するならば、「公共知識人としての哲学者でもあるメディア知識人」である。和辻は確かに清水と同様メディア知識人度合いが高い人物であるが、基本的には専門家としての哲学研究者としての側面は弱く哲学者そのものである、という箇所は清水と大きく異なる。

<sup>63</sup> 熊野(2009)より。和辻一族に流れる遺伝子らしい。

<sup>64</sup> 荻部(1995)によれば、和辻は大正デモクラシーや象徴天皇制度に賛同する文筆活動を行っている。

<sup>65</sup> 荻部(1995)によれば、和辻は最初西洋文化礼賛者だったが、古寺巡礼の旅で古代日本も古代ギリシャと同様素晴らしいと思うようになり、その後現代日本は古代日本の素晴らしさを受け継いでいると思うようになっていくとする。

<sup>66</sup> 竹内(2005)より。

<sup>67</sup> 竹田(2001)によれば、井上が当時東京帝国大学の哲学科の学生から平凡な官僚的秀才であると井の鉄と馬鹿にされていて、それに対して高尚で教養主義的なお雇い外国人講師ケーベルが好まれた。

<sup>68</sup> 熊野(2009)によれば、和辻がニーチェ論で卒論を書くことに井上が難色を示したため。

<sup>69</sup> しかし、かなり和辻なりの独自解釈が入っている。

#### 5.4.4.阿部次郎

指標的メディア知識人度合いは非常に低い。それは、以下のエピソードを見れば一目瞭然である。

- ・ヒット作は『三太郎の日記』のみ
- ・内容も極めて地味で思索的
- ・但し、教養主義の空気にマッチして大ベストセラー<sup>70</sup>（当時だけでなく戦後しばらくまで流行）
- ・但し、安倍・和辻などのケーベル・夏目人脈の一角を占め岩波に関与

これを見る限り、阿部がそもそもメディア知識人になったのも偶然の要素が大きい<sup>71</sup>と言える。

専門知識人度合いは指標的には低い。とはいえ、以下のようなエピソードはどちらかと言えば専門知識人らしさを感じさせる。

- ・東北帝国大学で初の美学講座開設
- ・こつこつと地道な研究を重ねる

当時は学会などのシステムがそろってなく、哲学系分野でまとめ的な立場になるのは難しかった。分野的な特徴を考慮しなければならないだろう。

公共知識人度合いは指標的にはそこそこである。

- ・岩波人脈だけでなく角川書店創業者角川源義など幅広く交流

以上を踏まえて、阿部を一言で表現すれば、「理念系としての教養主義者を自ら意図しないで体現したメディア知識人」ということになる。メディア知識人度合いが低いとはいえ、丸山のように戦略的に利用できる場所は利用するというよりは、本来の意味での「地味・慎重戦略」といってよい。『三太郎の日記』がヒットしなかったら、どこまで名前が売れたかもわからない。こつこつと教養を積んだ無名の学者として終わっていた可能性があるといえよう。

#### 5.4.5.安倍能成

指標的メディア知識人度はそこそこある。これも以下のエピソードを追って説明したい。

- ・ヒット作は唯一『岩波茂雄伝』
- ・『岩波茂雄伝』は岩波の親友として遠慮なく書いたと本人談<sup>72</sup>

---

<sup>70</sup>竹内(2014)によれば、それは戦前戦後のガンバリズムと相性の良い秀才向けだからである。

<sup>71</sup>丸山も『超国家主義の論理と心理』がこんなにも評価されるとは思わなかった、と言っている。本を出版したり雑誌に投稿する際は当然誰かに呼んでもらうことを期待するのであるが、大反響を想定することは難しいということである。

<sup>72</sup>岩波の女性関係についても記述している。安倍の岩波伝が現在でも岩波書店における岩波

- ・しかし、村上(2013)によれば「それでもまだまだ遠慮している」
  - ・佐藤(2015)はこれらをまとめて「岩波やその周辺の人物とはややずれた位置にいて、共に岩波ブランドを支えた」と指摘
  - ・岩波茂雄の親友として岩波文化人系メディア知識人のまとめの立ち位置
  - ・一高校長、文部大臣、学習院長歴任し教育行政で手腕を発揮
  - ・状況本位の折衷主義（鶴見(1960)）<sup>73</sup>的で官僚に好まれるタイプの秀才
- 鶴見俊輔の言う「状況本位の折衷主義」、に安倍が該当すると考えてみると新渡戸稲造との共通項がいくつも思い浮かぶ。それを専門知識人度合いや公共知識人度合いに関するエピソードでも確認していく。

専門知識人度合いは皆無である。

- ・竹田(2001)によれば安倍は平凡であるという
- ・著書は多いがエッセイ的かつ浅い
- ・むしろティーチングでの評価が高い

竹田の指摘がなくても、現在でも残る安倍の哲学上の主著というべき本はないため、学者としての活躍よりも教育者や行政者としての活躍の方が輝いている人物であると考えるのが現実妥当性が高いところである。

公共知識人度合いは指標上はちょうど中間値である。

- ・重光葵などと組んで終戦工作を行う（公に煽ってない）
- ・平凡故に多くの人と交流できる

無論、安倍に複数の分野を渡り歩くといい指標で〇がついているわけではない。安倍を一言で表せば、「最も世俗的に出世したメディア知識人のフィクサー」であるとまとめることが可能である。それは、平凡で官僚的で場を乱さない絶妙な人間関係のバランスを渡り歩くことが出来る、まさに鶴見の言う「状況本位の折衷主義」の権化と言える。

#### 5.4.6.津田左右吉

指標的メディア知識人度合いは中程度である。しかし、その割には炎上エピソードが豊富である。これについてまずはエピソードから確認していく。

---

伝の正伝であることを考えると、かなり思い切ったことであると言える。

<sup>73</sup> 状況本位の折衷主義とは、鶴見俊輔が「日本の折衷主義」にて新渡戸稲造のことを念頭に置いて作った理念型である。共産主義の教条主義派は教条主義者以外を修正主義と批判するが、似たものとして折衷主義があると鶴見が指摘し、折衷主義にも主体本位と状況本位との二種類があるとする。まず、修正主義は元となる思想に自己を結び付けたうえで、状況に働きかけて新しく学ぶものと定義し、それに対して折衷主義は考える主体か主体にはたらく状況のどちらかを中心として思想が作られるという。新渡戸稲造は典型的な状況本位の折衷主義であると鶴見は論じている。

- ・メディア知識人になるつもりがさらさらない<sup>74</sup>
  - ・ただし、有名になる前から岩波新書にも書いていた
  - ・南原繁の招きで東大非常勤講師になったことで東大出身ながらも東大教授に残れなかった蓑田胸喜に狙われる
  - ・蓑田との裁判で有名になり、早稲田大教授も文部省によって辞職させられる（しかし本人曰く「弾圧ではなかった」）
  - ・戦後は今度は尊王論を唱え天皇制を擁護したため進歩派と対立
  - ・本人の意図と関係なく炎上しやすい
  - ・文章は流れるように繰り返し書き、平凡的
  - ・戦後オールド・リベラリスト世代の一角を占める
- これらのエピソードから、津田は巻き込まれるタイプであることがわかる。

専門知識人度合いは指標上半分である。

- ・自説に自信満々
  - ・センシティブなテーマをオブラートに包まず飾らなくストレートに扱う
  - ・欠史十三代説（綏靖天皇～仲哀天皇までが創作であるという説）は現在の通説のうち一部を形成（現代では崇神天皇～仲哀天皇は存在しているとされている）
- 津田は活躍した時代的にもキャリア的にも仕方ないが、辞典編纂や学会設立といった業績があるわけではない。その上で、専門家としての業績は通説形成もあって高いと言える。

公共知識人度合いは指標上そこそこである。

- ・哲学・思想を日本・中国ともに扱う
  - ・専門外のことは扱わない傾向だが、論争・座談会には参加
- まとめると、津田は「炎上しやすいが本人の意思ではなく、学問的誠実さ故」と表現することができる。本来専門知識人として活躍していこうとしていた人物が、無自覚に炎上しやすい文章を書いたことと、運命のいたずらでメディア知識人になっていった姿が見える。

#### 5.4.7.小泉信三

指標的メディア知識人度合いは中程度である。しかし、『共産主義批判の常識』でベストセラーになった人物である。これの意図も含む以下のエピソードを挙げる。

- ・常識的で穏当な主張（通説中心）
- ・但し、世論を動かそうと意識はした
- ・煽り方が啓蒙的で学者らしい

---

<sup>74</sup> 東大の講師を兼任することで蓑田に目をつけられるまで、世間に注目されたわけではない。

- ・対立的な立場であるマルクス主義にも深い理解を示し、理性的な反論
- ・マルクス主義批判側のレベルも低いと判断しこれらにも啓蒙

小泉の父も慶応義塾長を務め、かつ福沢諭吉の直弟子だった。小泉自身福沢と同じ屋根の下で暮らしたこともある（神吉(2014)）<sup>75</sup>。福沢は『西洋事情』『学問のすすめ』『文明論之概略』などで庶民への啓蒙を行った啓蒙思想家であり、小泉の姿勢はまさしく福沢と同様である。

専門知識人度合いは指標上半分である。

- ・近代経済学をこつこつと研究
- ・ミーゼス、ハイエクなど当時の最新学説であるオーストリア学派<sup>76</sup>にも精通
- ・学界外の人も学んで当然、という態度

学界設立や辞典編纂にはやはり津田同様戦前の私学教授の身には津田同様難しかったといえる。その中でも近代経済学を、リカードを中心に研究し、オーストリア学派についても触れるのを戦後直後の段階で行うのはマルクス全盛の時代に於いては特筆すべきことである。

公共知識人度合いは指標上高い。

- ・マルクス主義批判のためにマルクス主義経済学も深く学習
- ・「みんなわかってない→ならば私が教えよう」という福沢諭吉的伝統を継承
- ・慶応義塾長としてGHQなどとも交渉<sup>77</sup>

経済学全体を見渡す姿はまさに総合的であり、慶應の啓蒙主義的伝統を引き継いだ存在であると言える。以上をまとめると、小泉は「学者として真面目なためにメディアに参戦」したと表現できる。専門知識人としての努力の結果公共知識人としてメディア知識人をす、というケースである。

#### 5.4.8.大塚久雄

指標的メディア知識人度合いは中程度である。

- ・学界が中心でメディアはサブ
- ・新書でも講演でわかりやすく専門知識をレクチャーするのに徹する
- ・しかし、自説理論をメディアを通じて拡散する点ではメディア知識人
- ・マルクス主義の経済観には批判的だがテキスト上では政治的煽りに乏しい
- ・大塚史学として大きな影響力（主に学界、教科書）

<sup>75</sup> 小泉の父が若くして急死したためとった措置である。

<sup>76</sup> 理性の不完全性を前提にしながら、伝統的な秩序としての市場を信頼する学派である。完全合理的な人間による活動から最大限の効用が得られると考える一般均衡理論などの古典派経済学とは、根柢のところでは立場が異なる。

<sup>77</sup> 当時慶應の教授のうち一部が公職追放の危機にあったからである。

以上のエピソードを見ると、メディア知識人としてのインパクトはそこまでないように見える。そのあたりについては次の専門知識人度合いに関連する。

専門知識人度合いは高い。

- ・戦前戦後で論文における立場が変動している<sup>78</sup>
- ・マルクス主義主流派の講座派に親和的
- ・キリスト教・講座派・ウェーバーを折衷しているが、鶴見俊輔(1960)の分析枠組みを用いると大塚も「状況本位の折衷主義者<sup>79</sup>」的であると分析できる
- ・知識/理論は穏当（ただし、現在大塚史学は古くなっているという（古田(2010)））

以上のエピソードを見るとわかるように、専門家としての活動に精力的である一方、その活動の仕方が過剰に自己防衛的である。

公共知識人度合いは低い。

- ・左右双方の攻撃に警戒し自己保身に過剰に走る傾向
- ・特に労農派を嫌うなど派閥的動き<sup>80</sup>をすると石崎の文章は示唆している

大塚は過剰に自己防衛的で、専門家としての仕事に派閥的な動きを挿入しようとする癖がある。そのため、大塚を表現するとしたら「学内政治主義的な、良心的メディア知識人」である。メディア知識人としての大塚は良きティーチャーであるが、専門家としての大塚は自分の領分を守るべく武装した存在である。

#### 5.4.9.都留重人

指標的メディア知識人度合いは高い方である。

- ・経済学の啓蒙（教養メディア的→メディア知識人的には良心的）
- ・反保守の立場から政治を積極的に煽り、ためらいはない
- ・平和運動にも参加
- ・一橋学長になった後もスタンス変わらず
- ・他分野の内容も書くが専門分野に比べると問題がある<sup>81</sup>

---

<sup>78</sup> 中野(2001)より、大塚は戦前の学術論文において統制経済論を支持している。

<sup>79</sup> 大塚の場合、時代的に歴史学は講座派と労農派では講座派優勢の時代であり、自分はキリスト教徒であり、更に自分の属する西洋経済史研究室の師匠本位田はウェーバー・ブレンダーノ・ゾンバルトといったドイツ社会経済論の理論を研究していた。大塚の主体的な問題意識というよりはこれらの状況から大塚が思想を折衷したことがわかる。

<sup>80</sup> 石崎(2006)では、大塚本人の認識のもとで大塚の人生が語られているが、誰に批判された、誰に攻撃されたという話が極めて多い。戦前では右派の論客だけでなくマルクス主義者にもかなり怯えており、戦後は特に労農派の宇野弘蔵と戦ったことが描かれている。

<sup>81</sup> 既に一回指摘してあるが、『日米安保解消への道』での対北朝鮮認識の甘さは当時の情報でも十分指摘できるものである。もっとも、拉致問題が北朝鮮によるものだと明確になる以前の時代であり、当時の岩波文化人の多くがまだ北朝鮮の状況に今よりは楽観視できる

これらを見る限り典型的なメディア知識人であるようにも見える。

専門知識人度合いは極めて高く満点である。

- ・ シュンペーターから直々に学び最先端の議論を学ぶ
- ・ 同窓がサミュエルソンで、サミュエルソン経済学を翻訳
- ・ 経済安定本部に次官級待遇で参加し、第一回経済白書を執筆
- ・ 自らも最新学説（三面等価の原理）<sup>82</sup>を発表
- ・ 池田勇人・下村治の高度経済成長論に反論し論争を展開
- ・ 反成長論の立場の学派を形成<sup>83</sup>

ただし、下の二つが専門知識人的でありつつメディア知識人的な要素でもある。

公共知識人度合いは低い。

- ・ 他分野への進出に失敗気味
- ・ 政治に参加するも下手<sup>84</sup>

以上を踏まえると、都留は「専門家としては超一流のメディア知識人」と表現できる。専門家としての輝かしい業績や来歴が、公共知識人やメディア知識人としての側面でだいぶ棄損してしまっている。大塚と似たような傾向であるが、大塚は学内政治を成功させる

---

状況ではあった。

<sup>82</sup> 三面等価の原理は現在でも公務員試験のマクロ経済学で出題されている通説であり、三面等価の原理を理解しないと総生産  $Y$  = 総消費  $Y$  = 総需要  $Y$  がわからなくなり、マクロ経済学のコアであるサミュエルソンの 45 度線分析やヒックスの IS-LM 分析の理解が困難になるという屋台骨の部分である。

<sup>83</sup> 若田部(2015)は自らを経済成長のためには財政金融政策が必要だと考える立場であると紹介したうえで、都留と弟子の伊東が反経済成長論的で財政金融政策に否定的であり、分配のみを主張していることを指摘している。

<sup>84</sup> 岩見(1994)によれば、安保闘争が終わってしばらくしたころ、岸信介は「進歩派の学者と会って話をしたい」と言い出したという。岸は進歩派学者の口から岸のビジョンに会う発言を言わせて箔をつけるのが目的であったようで、当時アジア各国の反共政策を支援していた岸は特に中国共産党シンパである竹内好のアジア主義をターゲットとし、都留からは自民党が進めている経済政策に対して経済学上のお墨付きを貰うのが狙いであったという。このことに気付いた竹内は無視したが、都留は蝶ネクタイを結んだ正式な恰好で岸に会いに行くも警戒して緊張してしまいほとんど有益な話が出来なかったという。更に、工藤(2006)によれば、カナダの外交官で GHQ の幹部としても出向したハーバード・ノーマンと都留は連携したうえで、叔父の木戸幸一を救うために逆に近衛批判を二人で展開し逮捕状を出させ自殺に追い込んだ一方で、ノーマンがマッカーシズムの被害に遭ったときには、都留はアメリカ上院の非米活動委員会に呼ばれて権威的かつ巧みな誘導尋問を受けて「ハーバード留学時代自分は共産党員で、ノーマンと親しかった」と答えてしまい、その一週間後にノーマンは自殺してしまう。都留の証言がノーマンの自殺に結びついたという説については鶴見俊輔などが反論をしているが、ノーマン自身のソ連スパイ疑惑を含めて真相はいまだ謎である。真相がどうであれ、これらのエピソードから見える都留重人像是超一流の専門家が下手に政治に嵌ったり巻き込まれたりするという姿である。



形でやっているのに対して、都留は学外に進出しようとして失敗しているところが異なる。

#### 5.4.10.宮城音弥

指標的メディア知識人度合いは中程度である。

- ・心理学の啓蒙<sup>85</sup>（教養メディア的→メディア知識人的には良心的）
- ・平和運動にも参加
- ・テレビにも積極的に出演し、岩波新書だけでも十冊を超えるなど新書執筆数が非常に多い
- ・戦後直後に『封建的マルクス主義』でスターリン批判の嚆矢
- ・世間的な受けを狙える超能力<sup>86</sup>や天才の研究を実施

これらのエピソードから見える宮城は学外にも積極的に顔を出すばかりでなく、専門分野でも受けを狙う清水的なメディア知識人を思い起こさせる。しかし、専門知識人度合いや公共知識人度合いをも見ていくとまた違った一面を見せるようになる。

専門知識人度合いは高い。

- ・心理学全分野を網羅
- ・『心理学入門』を英訳して海外でも出さないかと評価される
- ・辞典の執筆編集も担当

これらのエピソードを見ると、専門知識人としての評価も高いことが窺える。

公共知識人度合いは極めて高く満点である。

- ・ヴント、ジェームズから行動科学・認知革命までの全時代・全方法・全分野・全地域の心理学全般<sup>87</sup>を総合

---

<sup>85</sup> 佐藤達哉、溝口元編『通説 日本の心理学』（1997）では、宮城と南を1950年代の心理学ブームの当事者であると位置づけている。この本によれば、1950年代の心理学ブームが日本での心理学ブームとしてはもっとも大きいものであるとする。

<sup>86</sup> 宮城は「十分な証拠もなく肯定しないとともにアプリオリには何事も否定しない態度を要求するとし、信用できる研究者による厳密な検討の結果得られた一例は数千の不確実な体験に勝る」と『超能力の世界』（1985）で主張している。

<sup>87</sup> 心理学の広さが如何にすごいものかを説明するために、ここでは心理学の歴史について概説（詳しくは、サトウ、高砂(2003)などを参照のこと）する。19世紀末にドイツでヴィルヘルム・ヴント、アメリカでウィリアム・ジェームズ（『プラグマティズム』『純粹経験の哲学』の著者であり西田幾多郎に影響を与えた哲学者でもある）が近代学問として心理学を初めて大学で研究、教授する（哲学より、ほぼ社会学と同時期に分離した）。さらに、19世紀末にジークムント・フロイトが無意識を見出し精神分析学として弟子のユングらと共に心理学に貢献した。これらが初期の心理学の源流であるが、更に宮城によればフランスの心理学も存在し、米独仏三つの心理学の統合が最初の関心であった。

20世紀初頭に行動主義（客観的に観察（＝科学）可能な行動が心の現れであるとみなし、報酬と罰が行動に影響を与えると考える見方）革命、後半に認知の革命（行動主義への修

- ・学問の根本としての哲学に代わるべき心理学、という心理学主義者<sup>88</sup>

哲学から分岐した心理学を、哲学に代わる学問のコアとして心理学を基礎とし、心理学をすべて総合しようと企てる姿は公共知識人と専門知識人とを両立させる鑑であると言える。旧制高校時代から清水と親友であったという宮城<sup>89</sup>は、清水とはやや異なる形でメディア知識人を務めたのである。宮城を一言で表現すれば「心理学を根本に据えた公共知識人的メディア知識人」となる。

#### 5.4.11.南博

指標的メディア知識人度合いは高い。

- ・テレビ、雑誌の露出度高い
- ・共産党系団体である民主主義科学者協会で活動<sup>90</sup>
- ・批判対象が偏っている<sup>91</sup>
- ・政治の主張するが一貫している<sup>92</sup>
- ・煽りのためらいがない
- ・タブーだからこそ天皇制批判と性を話題として扱う<sup>93</sup>

---

正として、観察対象を行動と報酬/罰に限定せず、観察可能な認知に焦点) が起き現在の主流になっている。心の一般法則を探求する認知心理学＝基礎心理学が基本になっており、教育心理学/発達心理学/社会心理学などは応用心理学とされる。人間を対象と見なす実験心理学と不調を治す手助けになる知見としての臨床心理学と分けることも可能である。現在の心理学は自然科学・工学・社会科学・人文学が複雑に混ざり合っており学際的であり、更に主流派の実験・臨床心理学だけでなく精神分析学や超心理学といったオカルトに近いものまで心理学は広く含んでおり、これらの統合が晩年の宮城にとっての課題になっていた。

社会科学の立場から見ると社会心理学・教育心理学などが近隣分野となり、後述する宮城や南が活躍した時代では社会学と社会心理学の境界は今以上に不明確であり、しばしば社会学と社会心理学どちらについても扱う学者が出現した（例えば清水幾太郎、見田宗介など）。社会学的社会心理学と心理学的社会心理学（社会における個人の心理）との並列状態はおよそ1970～80年代に解消されていき、現在の社会心理学は心理学的社会心理学である。

<sup>88</sup> 宮城自身は以下のように主張している(1965)。「かつて哲学を基礎としていた人文社会科学が、今日では心理学を土台とするものと考えられるようになったことはいうまでもないことであろう。」

<sup>89</sup> 竹内(2012)による。

<sup>90</sup> 弟子の加藤秀俊が自伝で南に民科に招待されたことを書いている(1982)。

<sup>91</sup> 批判対象は自民党やその前身の自由党など保守政党であり、自分がかかわる共産党には決して批判はしない（『南博セレクション2』『同4』など）。

<sup>92</sup> 南の主張は権力の抑圧や社会の抑圧に対する批判と、庶民の自由さへの礼賛で一貫している。

<sup>93</sup> 『南博セレクション4』の解説で、弟子の市川(2004)はこう書いている。「著者が八〇歳を迎えたとき、「これから手がけたいテーマが二つある」と話されたことがある。「それは、いまだに日本社会でタブーとされている性と天皇制だ！」ということだった。実際南先生は、病床につかれてからも「性」と「天皇制」関連の文献はそれぞれまとめて身近に置か

ここを取り出せば典型的なメディア知識人である。

専門知識人度合いは高い。

- ・最新の社会心理学を学び体系化<sup>94</sup>
  - ・社会心理学の古典であるオルポート『デマの心理学』翻訳
  - ・日本社会心理学会で複数回トップに
  - ・国立大学において初の社会心理学講座設置
- 南が日本の社会心理学におけるパイオニアであることは間違いない。

公共知識人度合いは極めて高く満点である。

- ・社会学的社会心理学、心理学的社会心理学双方を扱う
- ・扱うテーマが幅広く、高級文化志向ではなく世俗にも明るい
- ・マクルーゼ（新左翼に親和的）の翻訳者であり、同じ左派内部に於いてはマルクーゼと丸山は対立的である

南のことを表現すれば、「政治的な立場が固定された、一流専門家にしてメディア知識人」ということになる。政治的な立場は共産党寄りで一貫して反保守主義である。そうでありつつ専門家としても公共知識人としてもできている。

## 5.5.まとめ

### 5.5.まとめ

5.1.では既にメディア知識人の度合いに近いもの同士で比較をした。5.3.では竹内の分類に5.2.を代入することで、竹内の分類が大雑把なものであることを示した。5.4.の分析をこれに代入することで、竹内の指摘していた「慎重戦略型」「転覆戦略型」と二つのメディア知識人の類型だけでなく類型を、その原因となるものとセットで指摘したい。

まずメディア知識人度合いの高さで大まかなグルーピングをした上で、メディア知識人度合いが最高の清水と和辻、低い丸山と阿部を比較する。それ以外の人物はメディア知識人度合いだけでなく専門知識人度合い・公共知識人度合いの数値の近さなども考慮したうえで更に似ている人物同士に分けて、比較をする。

メディア知識人指標が最高値であったのは清水と和辻であった。しかし両者は専門知識人度が大きく離れているということであった。しかし、清水は指標の度合いが低いものの十分に専門知識人である。では、両者は全く同じ「転覆戦略型」なのかとさえいえば、和辻の場合その理由がやや異なる。和辻は自分の感じるままに文学的・哲学的・美的直観だけで

---

れていた。「この二つのテーマに一〇年ずつ費やして、百歳まで生きる」というのが先生の計画だった。その強烈な研究意欲に、みな驚かされたことはいままでもない。」

<sup>94</sup> 博士論文が『体系社会心理学』である。

動いており、政治的発言への発展も自分の美意識由来である。ラディカルさをもって権力闘争の武器になって場を転覆する、という政治に対する意図が、そもそも政治そのものが目的であるという政治目的志向とラディカルさが融合している清水に対して和辻はラディカルであることは固定的で本人も動かしようがなく、発散する場も清水のように政治や学界といった権力闘争が起きやすい場で目立つことは目的ではなくあくまで自分の哲学的表現のための手段でしかない。そのため、人脈・派閥に対する接し方も清水は自ら研究所や運動を設立し自分の考えと合わなくなれば脱退し新たに場を作るということに熱心であったが、和辻は西田幾多郎の京都学派や岩波・安倍らの岩波文化人脈と共に行動することはあっても主体的にまとめる立場ではなかった。清水と和辻の転覆戦略的メディア知識人さは共通しているが、政治へ意図が目的か手段かで異なる。また、竹内はオールド・リベラリスト世代を清水世代よりはメディア知識人的ではないことを示唆していたが、和辻の存在を考えればそうではないと言える。

逆にメディア知識人度合いが低いのが丸山と阿部であった。しかし、丸山は専門知識人度合いが阿部より高く、逆に阿部は公共知識人度合いが丸山よりも高い。しかし、指標ではそれぞれ低かった丸山の公共知識人度合いや阿部の専門知識人度合いは実際は高そうである。では、丸山と阿部はそれぞれ同じタイプかといえばそうではない。丸山はメディア知識人であろうと極めて戦略的にメディア知識人であろうとするが、阿部はメディア知識人であるつもりがない。竹内は丸山を守りの「慎重戦略」と名付けるが、慎重ではあるものの実際は攻撃的である。また、竹内は鶴見を「知識人界における覇権を目指さないことによる覇権という無欲（退行計画）の勝利」と評しているが、阿部の無欲ぶりは鶴見以上である。鶴見はメディア知識人の中で勝つ必要がないだけでフィールドには居続けたが、阿部はそもそもメディア知識人のフィールドから途中で降りてしまった。阿部が大正教養主義世代で、かつ哲学出身で地方出身であることが丸山との大きな相違点であるが、大正教養主義で哲学で地方出身でありつつメディア知識人をやった人物は和辻哲郎がいるので、世代や出身校・キャリア・専門分野が要因とは思にくい。結局、政治的センスと政治欲の具現化が起きて政治目的志向のある丸山とそうでない阿部、という違いであると解釈するのが自然である。政治目的志向の有無の結果、丸山は東大紛争でダメージを受けるまでの間政治権力に対して攻撃的にふるまったが、阿部は最初からメディア知識人であることを放棄していったという違いも発生している。

最後に、メディア知識人度合いが比較的近い残り七人の比較である。このうち、図 8 のグラフを見ると、メディア知識人度合い・専門知識人度合い・公共知識人度合いすべての指標の数値を見ると、津田・小泉、大塚・都留、宮城・南がそれぞれ似ていて安倍だけズレている。大塚・都留は専門知識人度合いが高く公共知識人度合いが低い、という特徴を持っており、宮城と南はその両方が高い。津田・小泉は数値的には中程度であるからである。

大塚・都留はともに経済学者であり、唱えた学説が通説になったこともある学者でもあ

る。また、学内外とベクトルは違うが自らの派閥を形成し、自らの派閥に対して固定的であり自派閥強化のために動くという、派閥的な動きも同様である。経済学者はマルクス経済学か近代経済学か、近代経済学の中でも古典派かケインズ派か、といった派閥抗争が今でも続いている。二人がアカデミー内部で採用した戦略に名付けるとしたら「学内政治戦略」である。また、二人とも世代は同じである。出身校・キャリアが違うが、だからといって出身校・キャリアの違いが二人の覇権戦略の違いの要因にはならない。東大卒東大教授で学外政治する人物としては丸山などが該当するからである。よって、東大卒東大教授の大塚だから学内政治のみに留まり、ハーバード卒一橋教授の都留だから運動にも積極的に参加したとは言いがたい。メディア知識人としての動く意図は、大塚は政治志向目的がなく教育啓蒙に徹している代わりに都留は政治志向目的である。この二点が相違点である。

宮城と南はともに心理学者であり、心理学ブームの牽引者である。さらに時代的にはまだ現在ほど専門分化が進んでいなかった時代であり専門知識人でありながら公共知識人であることも可能な頃であった。二人とも心理学内部の幅広い領域を総合することで知識人としての成功を目指しているため、その様相は「総合戦略」と名付けることが出来る。旧帝国大学教授になれなかったというキャリア・世代・分野・心理学ブーム牽引者としてのメディア知識人の立ち位置の四つの要素は宮城と南共に共通しており、同じ影響を与えたと言える。一方で、宮城と南の違いは結果部分に着目すればメディアを通じた政治に対する戦略が宮城は慎重戦略、南は転覆戦略を採用したことが第一点、宮城は清水の親友として清水の派閥形成に協力をしていくという弱い派閥形成を行うのに対して、南は派閥加入も派閥形成もせずあらゆる人脈を持つようとしている。要因としては、宮城は政治目的志向を持っていなかったのに対して、南は反権力的・自由的であることを貫くためにも政治目的志向を強く持ったことが挙げられる。

津田・小泉は実質的には専門家としては自らの意図としては慎重戦略（ただし、戦前の私大教授なので竹内の言葉を使えば分相応戦略であるとも言える）を採用しており、派閥的なものについては無関心であり無派閥的であるため、専門知識人としての要素が最も強い人物である。しかし、戦前からの私大教授という学問をまとめる立場になりにくい事情が専門知識人度合いの低さに影響をしている。つまり、度合いの数値の変動にキャリアと出身校は大いに関係するということになる。両者は分野こそ違うが、オールド・リベラリスト世代の私大教授で専門分野をよく頑張っている学者、の典型であると見なすことが出来る。その両者が何故メディア知識人になってしまったか、の理由が異なる。津田は自分で意図こそしないものの、世間で問題になりかねない文章を書いて東京帝国大学非常勤講師になったことで、蓑田胸喜というクレーマーに見つかってしまったからであり、小泉は世の中の無学ぶりに我慢ならなくて啓蒙目的で自ら参戦することになった。このメディアにおける政治の場での動きを、津田は「派閥無視戦略」、小泉は「派閥越え戦略」と名付けることができよう。

最後に残った安倍は、政治・学問ともに慎重戦略であり、専門知識人度合いも皆無で

あり、一方で岩波文化人のフィクサーであり同じ「状況本位の折衷主義者」であっても大塚とは異なり幅広い交流ができる強い人脈形成型である。ここが安倍の独自さと言える。

整理すると、清水と和辻はそれぞれ政治・学問ともに転覆戦略を採用して扇動を加速するメディア知識人らしいメディア知識人であり、その違いは政治目的志向の有無である。

丸山と阿部は扇動に対して抑制的で学問の場では共に慎重戦略を採用しつつも、丸山は政治目的志向があるため、政治では慎重戦略ながらも東大紛争でダメージを受けるまでは政治的発言を厭わなかった。阿部はそれに対して『三太郎の日記』のヒット後はメディア知識人であることをやめていった。大塚と都留は、共通点は経済学者という分野と派閥的な動きであり、大塚はメディア知識人としては啓蒙活動でのみ動き政治には消極的であるのに対して、都留は政治目的志向をもって転覆戦略を採用した部分が相違点である。宮城と南は共通点は心理学という分野と世代・心理学ブームを牽引し心理学を総合するというメディア知識人の立ち位置が全部近いところであり、相違点は派閥に対する考え方の違いと政治目的志向の有無からくる政治における慎重戦略と転覆戦略の違いである。津田と小泉は共通項は戦前オールド・リベラル世代であること・戦前ステータスが低かった私大卒私大教授であるという学校歴資本とキャリア・無派閥的な動き・学問の場における慎重戦略の採用で、相違点はメディア知識人の場へと飛び出すきっかけが無自覚炎上であるか啓蒙かであることからくる政治の場での戦略の違いである。安倍は状況本位の折衷主義者であり岩波や夏目との人脈を活かすことによって、メディア知識人のゲートキーパーを任じたところが独自性である。以下の表(表9)ではこれらをまとめた。

|    | メディア知識人度合い | メディア知識人として動く意図 | 政治目的志向性 | 扇動加速/抑制(心情パターン) | 人脈・派閥    | 採用した戦略(メディア(政治)の場) | 採用した戦略(学問の場) |
|----|------------|----------------|---------|-----------------|----------|--------------------|--------------|
| 清水 | 高          | あり             | あり      | +               | 派閥形成かつ横断 | 転覆戦略               | 転覆戦略         |
| 和辻 | 高          | あり             | なし      | +               | 人脈依存型    | 転覆戦略(結果的)          | 転覆戦略         |
| 丸山 | 低          | あり             | あり      | -               | 人脈形成型    | 慎重戦略(攻撃→撤退)        | 慎重戦略         |
| 阿部 | 低          | なし             | なし      | -               | 人脈依      | 慎重戦略(撤             | 慎重戦略         |

|    |     |    |    |   |           |                    |             |
|----|-----|----|----|---|-----------|--------------------|-------------|
|    |     |    |    |   | 存型        | 退)                 |             |
| 大塚 | 中   | 啓蒙 | なし |   | 派閥形成かつ固定  | 慎重戦略               | 学内政治戦略      |
| 都留 | やや高 | あり | あり |   | 派閥形成型かつ固定 | 転覆戦略               | 学内政治戦略      |
| 宮城 | 中   | 啓蒙 | なし |   | 弱い派閥形成型   | 慎重戦略               | 総合戦略        |
| 南  | やや高 | あり | あり | + | 人脈形成型     | 転覆戦略               | 総合戦略        |
| 安倍 | 中   | あり | あり |   | 強い人脈形成型   | 慎重戦略               | 慎重戦略        |
| 津田 | 中   | なし | なし |   | 無派閥的      | 派閥無視戦略<br>(意図せず炎上) | 慎重戦略(分相応戦略) |
| 小泉 | 中   | 啓蒙 | なし |   | 無派閥的      | 派閥越え戦略<br>(自ら意図)   | 慎重戦略(分相応戦略) |

表 9

## 6. 結論

表 9 を見てわかることとして、知識人として採用する戦略はメディアを通じた政治の場と学問の場で一致するとは限らない。清水は政治でも学問の場でも目立つように転覆戦略を採用したが、都留や南のように転覆戦略の採用を政治に限定する人物もいる。竹内・ブルデューの枠組みでは両者を連続するものであると見なしているが、それは単純である。

更に、竹内はブルデューの枠組みを利用して慎重戦略と転覆戦略の二つを類型として見出しているが、単純にこの二つに入りにくい人物も多く、他の類型を見出すことが出来た。

また、清水も丸山もメディア知識人として動く意図も政治目的志向も存在する人物であるが、メディア知識人にはこの二点が共にあるかどうかは別である。そして、政治志向目的があると政治では転覆戦略を採用しやすく、丸山のようにメディア知識人度合いが低く扇動抑制傾向があるために慎重戦略を採用した人物であっても政治的発言とプロパガンダそのものの実行はまさに「慎重に」「戦略的に」行った。

竹内は清水や丸山といった自分の意志で政治の場に出てメディア知識人を務めた人物のみを扱っていた。しかし、和辻や津田のように本人の意思とは別にメディア知識人として政治の場に出ることになる場合も存在する。そのため、意図と結果のパラドックスをメディア知識人論において見出すことができた。

更に、扇動に対する態度や人脈・派閥とのかかわり方といった要素も関係してくる。派閥形成かつ固定的な大塚と都留は学問の場では学内政治戦略を採用している。

政治目的志向の有無と派閥に対する考え、更には扇動加速/抑制傾向は社会学的属性には含まれないものであり、竹内・ブルデューの想定していた「出身校・キャリア・出身地の文化資本が覇権戦略を決定する」という構図はこれも単純なものであることがわかる。

また、経済学者である大塚と都留は派閥的に動きやすく、戦後初期の心理学者かつ心理学ブーム牽引者である宮城と南は共に学問の場では総合戦略を採用するなど、専門分野の影響力も見出せる。

以上のことから、竹内の類型論の批判的検討による精緻化を行うことが出来た。

本研究の成果をまとめると、以下のように要約できる。

- ・竹内はオールド・リベラリスト世代や私大出身者のメディア知識人、経済学者や心理学者を射程に入れなかったが、本研究では分析対象として扱った。
- ・覇権戦略の型を、メディアを通じた政治の場と学問の場に分離し、両者が一致しない場合があることが分かった。
- ・覇権戦略の型の要因は出身校・キャリア・出身地の文化資本という竹内・ブルデューが想定していた枠組み以上に専門分野・パーソナリティが関係している。
- ・転覆・慎重戦略以外の類型も抽出するよう努めた。
- ・竹内はオールド・リベラリスト世代をメディア知識人度が低い世代であると示唆したが、



オールド・リベラリスト世代でもメディア知識人度が高い人物は存在することを示した。  
・自らの意図と関係なく結果的に炎上する事例や転覆戦略を採用する事例が存在し、意図と結果のパラドックスが起きる事例を踏まえた類型論を考えた。

## 参考文献

- 清水幾太郎.倫理学ノート.講談社,2000,475p.  
丸山眞男.政治の世界 他十篇.岩波書店,2014,480p.  
丸山眞男.超国家主義の論理と心理 他八篇.岩波書店,2015,576p.  
丸山眞男.自己内対話 3冊のノートから.みすず書房,1998,287p.  
丸山眞男.新版 現代政治の思想と行動.未来社,2006,585p.  
和辻哲郎.古寺巡礼,岩波書店,1979,287p.  
和辻哲郎.初版 古寺巡礼.筑摩書房,2012,316p.  
和辻哲郎.風土 人間学的考察.岩波書店,1979,299p.  
阿部次郎.新版 合本 三太郎の日記.角川学芸出版,2008,573p.  
安倍能成.戦後の自叙伝.日本図書センター,2003,273p.  
津田左右吉.シナ思想と日本.岩波書店,1938,201p.  
小泉信三.共産主義批判の常識.講談社,1976,229p.  
大塚久雄.社会科学の方法 ―ヴェーバーとマルクス―.岩波書店,1966,223p.  
大塚久雄.社会科学における人間.岩波書店,1977,227p.  
都留重人.経済学はむずかしくない 第2版.講談社,1974,p.  
都留重人.日米安保解消への道.岩波書店,1996,210p.  
都留重人.近代経済学の群像.岩波書店,2006,p.  
宮城音弥.心理學入門.岩波書店,1952,229p.  
宮城音弥.心理学入門 第二版.岩波書店,1965,218p.  
宮城音弥.新・心理学入門.岩波書店,1981,211p.  
宮城音弥.天才.岩波書店,1967,203p  
宮城音弥.心とは何か.岩波書店,1981,240p.  
宮城音弥.超能力の世界.岩波書店,1985,185p.  
南博.日本人の心理.岩波書店,1953,213p.  
南博.南博セレクション2 日本の社会と文化.勁草書房,2001,511p.  
南博.南博セレクション4 マスコミと風俗.勁草書房,2003,505p.  
南博.南博セレクション7 出会いの人生 自伝のころみ.勁草書房,2004,538p.  
南博.日本人論 明治から今日まで.岩波書店,2006,481p.  
蒲島郁夫,竹下俊郎,芦川洋一.メディアと政治.有斐閣,2010,309p.  
青木保.「日本文化論」の変容 戦後日本の文化とアイデンティティー.中央公論新

社,2001,212p.

阿部謹也.「世間」とは何か.講談社,1995,260p.

阿部謹也.「教養」とは何か.講談社,1997,186p.

阿部謹也.「世間」論序説—西洋中世の愛と人格.朝日新聞社,1999,231p.

阿部謹也.学問と「世間」.岩波書店,2001,175p.

阿部謹也.日本人の歴史意識—「世間」という視角から.岩波書店,2004,208p.

阿部謹也.「世間」への旅 西洋中世から日本社会へ.筑摩書房,2005,288p.

阿部謹也.近代化と世間 私が見たヨーロッパと日本.朝日新聞出版,2014,192p.

レイモン・アロン. 戦争を考える クラウゼヴィッツと現代の戦略.政治広報センター,1978,530p.(原著 1976)

ベネディクト・アンダーソン. 定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行. 書籍工房早山,2007,400p.(原著 2006)

飯田泰之,中里透.コンパクトマクロ経済学 第2版.新世社,2015,194p.

池田謙一.政治のリアリティと社会心理 平成小泉政治のダイナミックス, 木鐸社,2007,313p.

石井洋二郎. 差異と欲望—ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む.藤原書店,1993,364p.

石崎津義男. 大塚久雄 人と学問—付 大塚久雄「資本論講義」.みすず書房,2006,237p.

伊藤昌亮. デモのメディア論 社会運動社会のゆくえ.筑摩書房,2012,270p.

井上忠司.「世間体」の構造 社会心理史への試み.講談社,2007,283p.

岩見隆夫. 昭和の妖怪 岸信介.中央公論新社,2012,275p.

植村和秀.丸山眞男と平泉澄 昭和期日本の政治主義.柏書房,2004,338p.

植村和秀.「日本」への問いをめぐる闘争 京都学派と原理日本社.柏書房,2007,297p.

植村和秀.昭和の思想.講談社,2010,180p.

大嶽秀夫.戦後政治と政治学.東京大学出版会,1994,224p.

奥井智之.社会学の歴史.東京大学出版会,2010,314p.

ホセ・オルテガ・イ・ガセット.大衆の反逆.筑摩書房,1995,305p.(原著 1929)

加藤晴久.ブルデュー 闘う知識人.講談社,2015,288p.

苅部直.光の領国 和辻哲郎.岩波書店,2005,368p.

苅部直.丸山眞男 リベラリストの肖像.岩波書店,2006,228p.

苅部直.移ろいゆく「教養」.NTT 出版,2007,252p.

苅部直.岩波書店百年史 3 「戦後」から離れて.2013,304p.

神吉創二. 伝記 小泉信三. 慶應義塾大学出版会.2014,240p.

工藤美代子.スパイと言われた外交官 ハーバート・ノーマンの生涯.筑摩書房,2007,444p

工藤美代子.われ巢鴨に出頭せず 近衛文麿と天皇.中央公論新社,2009,473p.

熊野純彦. 和辻哲郎 文人哲学者の軌跡.岩波書店,2009,246p.

久米郁男. 原因を推論する 政治分析方法論のすゝめ.有斐閣,2013,278p.

鴻上尚史.「空気」と「世間」.講談社,2009,256p.

紅野謙介.物語 岩波書店百年史 1 「教養」の誕生.岩波書店,2013,320p.

ウィリアム・コーンハウザー.大衆社会の政治.東京創元社,1961,299p.(原著 1959)

小浜逸郎.日本の七大思想家 丸山眞男/吉本隆明/時枝誠記/大森荘蔵/小林秀雄/和辻哲郎/福澤諭吉.幻冬舎,2012,475p.

エドワード・W・サイード.知識人とは何か.平凡社,1998,235p.(原著 1994)

佐藤卓己.現代メディア史.岩波書店,1998,259p.

佐藤卓己.メディア社会 現代を読み解く視点.岩波書店,2006,221p.

佐藤卓己.物語岩波書店百年史 2 「教育」の時代.岩波書店,2013,384p.

佐藤卓己.大衆宣伝の神話 マルクスからヒトラーへのメディア史.筑摩書房,2014,528p.

佐藤卓己.『図書』のメディア史——「教養主義」の広報戦略.岩波書店,2015,320p.

佐藤達哉,溝口元編.通史 日本の心理学.北大路書房,1997,643p.

サトウタツヤ,高砂美樹.流れを読む心理学史 世界と日本の心理学.有斐閣,2003,247p.

佐藤直樹.「世間」の現象学.青弓社,2001,220p.

佐藤直樹.暴走する「世間」 世間のオキテを解析する.バジリコ,2008,257p.

トニー・ジャット.知識人の責任 ブルム、カミュ、アロン.晃洋書房,2009,247p.(原著 1998)

下村治.日本経済成長論.中央公論新社,2009,445p.

庄司武史,清水幾太郎 異彩の学匠の思想と実践.ミネルヴァ書房,2015,426p.

ショウペンハウエル.読書について 他二篇.岩波書店,1983,158p.

杉田敦編.岩波講座 政治哲学 4 国家と社会.岩波書店,2014,240p.

鈴木貞美.日本の文化ナショナリズム.平凡社,2005,277p.

竹内洋.教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化.中央公論新社,2003,278p.

竹内洋.丸山眞男の時代 大学・知識人・ジャーナリズム.中央公論新社,2005,339p.

竹内洋.革新幻想の戦後史.中央公論新社,2011,546p.

竹内洋.知識人とメディア 清水幾太郎の覇権と忘却.中央公論新社,2012,373p.

竹内洋.大衆の幻像.中央公論新社,2014,321p.

竹田篤史.物語「京都学派」 知識人たちの友情と葛藤.中央公論新社,2012,398p.

谷口将紀.シリーズ日本の政治 10 政治とマスメディア.東京大学出版会,2015,232p.

筒井清忠.日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察.岩波書店,2009,242p

鶴見俊輔.鶴見俊輔著作集 3.筑摩書房,1975,466p.

富永健一.戦後日本の社会学 一つの同時代学史.東京大学出版会,2004,471p.

ジョセフ・S・ナイジュニア,デイヴィッド・A・ウェルチ.国際紛争 原書第9版 理論と歴史.有斐閣,2013,464p.(原著 2013)

中村敏男.大塚久雄と丸山眞男 一動員、主体、戦争責任.青土社,2014,359p.

西部邁.知識人の生態.PHP 研究所,1996,197p.

エリザベート・ノエル＝ノイマン.沈黙の螺旋理論 改訂復刻版 世論形成過程の社会心理学.

- 北大路書房 2013,328p.(原著 1966)
- 羽生辰郎.学問とは何か 『マックス・ヴェーバーの犯罪』その後.ミネルヴァ書房,2008,560p.
- ジュリアン・バンダ.知識人の裏切り.未来社,1990,323p.(原著 1927)
- 古田博司.東アジア イデオロギーを超えて.新書館,2004,283p.
- 古田博司.日本文明圏の覚醒.筑摩書房,2010,296p.
- ピエール・ブルデュー.ディスタンクシオン<1> 社会的判断力批判 ブルデューライブラリー.藤原書店,1990,512p.(原著 1979)
- ピエール・ブルデュー.ディスタンクシオン <2> -社会的判断力批判 ブルデューライブラリー.藤原書店,1990,492p.(原著 1979)
- ピエール・ブルデュー.政治 政治学から政治「界」の科学へ.藤原書店,2003,186p.
- ピエール・ブルデュー.国家貴族 1 エリート教育と支配階級の再生産.藤原書店,2012,480p.(原著 1989)
- ピエール・ブルデュー.国家貴族 2 エリート教育と支配階級の再生産.藤原書店,2012,352p.(原著 1989)
- マイルズ・フレッチャー.知識人とファシズム 近衛新体制と昭和研究会.柏書房,2011,362p.(原著 1976)
- マーシャル・マクルーハン.メディア論 人間の拡張の諸相.みすず書房,1987,384p.(原著 1964)
- 松田美佐.うわさとは何か ネットで変容する「最も古いメディア」.中央公論新社,2015,262p.
- 村上一郎.岩波茂雄と出版文化 近代日本の教養主義.2013,講談社,176p.
- 森村進.法哲学講義.筑摩書房,2015,324p.
- 山本七平.空気の研究.文藝春秋,1983,237p.
- P.F.ラザースフェルド.ピープルズ・チョイス.芦書房,1987,266p.(原著 1944)
- ウォルター・リップマン.世論 上.岩波書店,1987,270p.(原著 1922)
- ウォルター・リップマン.世論 下.岩波書店,1987,306p.(原著 1922)
- ギュスターヴ・ル・ボン.群集心理.講談社,1993,302p.(原著 1985)
- 若田部昌澄.ネオアベノミクスの論点 レジームチェンジの貫徹で日本経済は復活する.PHP研究所,2015,235p.
- 福山 誠之 館 同窓会 . ” 福山 誠之 館 同窓会 ” . 藤原 弘達 .<http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jinmeiroku/fujiwara-hirotatsu/fujiwara-hirotatsu.htm>,(参照:2015/12/15).
- 加藤秀俊.”加藤秀俊データベース”.『わが師わが友 ーある同時代史』(中央公論社、1982年) . [http://homepage3.nifty.com/katodb/doc/wagashi/wagashi\\_index.html](http://homepage3.nifty.com/katodb/doc/wagashi/wagashi_index.html),(参照:2015/11/20).
- 加藤秀俊.”加藤秀俊データベース”.南博氏と社会心理学(上) .<http://homepage3.nifty.com/katodb/doc/text/2373.html>,(参照:2015/11/30).

加藤秀俊.”加藤秀俊データベース”.南博氏と社会心理学(下).  
<http://homepage3.nifty.com/katodb/doc/text/2374.html>,(参照:2015/11/30).

## 謝辞

本論文執筆にあたり、お世話になった方々に御礼申し上げます。鋭く適切なアドバイスで長い議論に付き合ってくれた指導教員の後藤嘉宏先生に心から感謝致します。横山幹子先生には副指導教員として後藤研究室のゼミに参加したうえで鋭い質問と有用なご意見をいただきました。ありがとうございました。

後藤研究室の皆様には日頃の議論で多くの示唆や論点整理に協力していただきました。また、人文社会科学研究科国際公共政策専攻の古田博司先生には、他研究科の学生にも拘わらず有益な参考文献の提示や貴重な助言をいただきました。ありがとうございました。